

梅田雲浜安政大獄吟味関係資料

凡例

- 一 掲載する六本の資料は、一八五八年（安政五）の安政の大獄の前後に作成されたとみられる、元小浜藩士梅田雲浜の吟味（取調）に関する資料である。
- 一 資料は、長野県在住の角田和之氏の所蔵にかかる。
- 一 文字は、原則として常用（通用）漢字を用い、変体仮名は平仮名に改めたが、次に掲げる仮名・俗字・慣用字句は残した。
- 一 刁（眞） 扣（控） ㇿ（より） 而（て） 而已（のみ） 江（え）者（は） 与（と） 茂（も） 斗（ばかり）
- 一 校訂にあたって、本文中に読点、並列点を加えた。
- 一 判読不能な文字は、□で示した。
- 一 資料の闕字・平出などは省略した。
- 一 注記は、傍注として（ ）で示したほか、資料中の小浜藩・福井藩関係の人名注は、資料のあとにまとめて示した。
- 一 資料中の朱書は、その旨傍注で示すとともに、朱書の部分を「」で示した。
- 一 本書の伝来や従来の研究については、本紀要収載の「角田家本梅田雲浜安政大獄吟味関係資料について」を参照されたい。

元小浜藩士梅田源次郎外四人身元之儀二付覚

梅田源次郎外四人身元之儀、内密承探候趣、左之通御座候、

烏丸御池上ル二条殿町

東側三軒目

町中借屋

儒者

梅田源次郎

四十二三才

家内上下七人暮

右源次郎儀、若州藩中矢部源次舍弟之由、三条東洞院西江入町北側二

借宅罷在、昨巳年冬、前書之町分江転宅、是迄官武之内より召抱之沙汰

有之候得共、相断居候由二而、当時重モ二青蓮院宮・長州屋敷江度々

立入候由、此外官武所々江茂立入候趣二候得共、先々不相分候由、

東三本木丸太町上ル南町

東側

木屋三郎助借屋

儒者二而詩人之由

梁川星巖（全齋）

七十才斗

家内上下五人暮

此星巖儀、此節流行病二而昨夕死去致し候由、

右星巖儀、身元耽与不分、昨巳年十月頃迄加茂川東川端丸太町上ル町
二借宅、前書之町分江転宅、官武之内江立入候趣ニ候得共、先々不相
分候由、

室町夷川上ル町東側

家持

御所典葉寮医師

安藤石見介

四十二三才

家内上下五人暮

右石見介儀、播州出生ニ而、養父美濃介八九ヶ年以前相果候付、養子
ニ参り候者之趣ニ而、凡三日隔位ニ御所向江罷出候由、

西寺内

大宮七条上ル町

家主不分

馬借渡世いたし居候、

周蔵事

古高重助

三十四才

右周蔵事重助儀、生国江州栗太郡古高村郷士ニ而、地頭代官役も相勤
候者之処、村方納米勘定向不正筋有之、八九ヶ年以前村方立退当地
所々ニ罷在、大津御代官所ニ暫手代いたし、四五ヶ年以前より前書之

町分ニ借宅馬借渡世いたし、本願寺家中向又者官武之内江立入候者之
由、

右之通相聞申候、尤大沢雅五郎之儀者跡より可申上候、先ツ此段申上候、
以上、

九月三日

〔付紙此風聞書者、昨日差上候梅田源一郎其外承合書ニ御綴済被成下候様

仕度奉存候、一

大沢雅五郎（鼎斎、敬邁）身元承探候趣、左之通御座候、

堺町二条下ル町東側

永野屋次郎兵衛借屋

儒者

大沢雅五郎

四十七才斗

家内上下六人暮

右雅五郎儀、十二三ヶ年以前より前書之町分ニ借宅、近頃御役所学問
所江茂罷出候者之由、

一 同人兄ニ烏丸殿家来大沢酒造与申者有之、中立壳辺ニ住居いたし候

処、去ル寅年類焼ニ逢当時雅五郎方南隣家ニ罷在、同人方勝手より

通路相成候由、

右之通相聞候付、此段申上候、以上、

九月四日

十月朔日 元小浜藩士梅田源次郎定明吟味申口

午十月朔日、梅田源次郎(雲浜、定明)所持雜物書類之内を以、御不審之廉御吟味御座候付、源次郎申立承り書

覚

〔(朱書)卷之印〕

一 四月廿七日附、梅田源次郎江赤根武人(赤根)之差遣候書面之内、疑候得者不容易内通筋之体ニ相聞江、天下之形勢関東ニ而者儒者書生浪人ニ至迄作する事を忌諱セラレ源次郎之風評有之、可致用心之文言等御尋御座候処、

源次郎申口

此儀赤根武人者、当年式拾式三才之若輩ものニ而、浦鞆負家来赤根忠(雅平)右衛門養子ニ有之一向宗同州遠崎明円寺月性(周)与申もの之学弟ニ有之、同人同道一昨々年より上京いたし居、西本願寺別荘ニ罷在、一昨年月性帰国ニ付、武人此もの方ニ同居いたし、月性儀者当夏相果、武人儀者昨夏松平大膳大夫殿江戸表江御下向ニ付、武人儀も罷下り、漸此頃罷歸り、劍術相好候ものニ而、江戸表ニ罷在候節、当四月廿七日出之手紙ニ而、先年垂墨利加渡来之砌越州福井家老稲葉務人(務)与申もの、若合戦ニ可相成も難斗候付、江戸江罷越所々之海防策等之便宜いたし呉候様申之、路用等呉候付、五六人江戸表江罷下り候処、務人相果候間、京都江罷歸り候義も有之候付、江戸表ニおいても此もの名前高く御座候間、若如何之

儀有之候而者与存心添いたし候儀与相見江候得共、何分武人者若

年もの之儀ニ而、取ニ不足ものニ付、右等之儀返書等も不差遣捨

置候旨申之候、

一 桜田任藏者、素常陸之もの之由ニ候得共、未夕面会不致旨申之候、(桜任藏、真金)

〔(朱書)右武人書面、源次郎答方之趣一段不分明ニ付、再御吟味御座候而可

然候様奉存候、〕

〔(朱書)式之印〕

一 四月廿九日、池田順平之梅田源次郎宛之書面之内、昨年来郷中江忠節之説を書毎度示シ、会毎ニ郷中之人江常々大義を説居、何分人氣引立候得者宜様存、実者甲冑百式三拾斗之事ニ候間、此上具足之千余も出来いたし候得者、急度御用ニも可相立様ニ存候旨ニ而、源次郎之計策者如何候哉之書面、且竹林氏江も伝声之儀認有之候儀を御尋御座候処、

此儀池田順平与申候者、紀州領之郷士ニ而、当時之住所不覚候得共、此もの方江素読稽古ニ参り候事も有之、其後大和十津川辺江参り素読講釈等いたし居候処、此頃ニ而者国元江罷歸り候由承り候、然ル処十津川者格別由緒有之候所ニ而、先年ヲロシヤ船大坂江渡来之砌差越候書面ニ而、泉州堺江五百人御加勢被仰付、然ル処右十津川与申候者御領地ニ而無年貢之場所ニ有之、郷中五拾八ヶ村南北拾五里東西七里之谷ニ候而、毎度孫呉子之講釈師杯入込居、乍併至而貧窮ニ而難渋候得共、由緒有之、非常之節ハ公儀江御加勢ニ鑑千本を以可罷出由、右ニ付順平も書物読候もの故被相頼、甲冑も出来、村方も立行候様世話いたし呉候様、猶又同人之

此もの江申越候義ニ有之、且長州産物之塩者相送り遣居候得共、
 迎も難及与存込居、右者此度長州者兵庫之御加勢ニ付、十津川材
 木御買上ニ被成下度存付候間、其段願置候得共、今ニ御沙汰者無
 之、既先年浅野和泉守殿此もの江十津川江鉄炮之世話いたし遣候
 ハ、如何之旨御尋有之候得共、鉄炮玉菓共御下ケ相成候ハ、可
 然旨申上置候儀も有之、全前書一条書面ニ御座候旨申之候、

一 竹林氏与有之候者周助与申彦根之家来ニ而、京都ニ医業罷在中野
 若狭之甥歟之由、順平も周助方ニ同居罷在候もの之旨申之候、

〔右順平書面、源次郎義容易く申立候得共、別格之知る人ニも無之段
 之申口ニ相聞候ニ対し候ハ、余り打明候文言ニ相見、今一応御尋
 之上、源次郎申口御熟考ならてハ何共虚実難分候様奉存候、〕

〔三之印〕

一 十月十五日附、永鳥三平事帰山(秀実)源次郎宛之書面之内、松田生事下

り候方宜見込之処、近頃之処ニ而者先帰国不仕、暫時潜伏仕時を待
 方可然、併亡命ニ相究候ハ、方角ニハ逐捕も難計、可然世話之儀
 山田江談合頼候旨、且松田生事先ツ三四年之処者何卒御世話御取懸
 り、当時沿海東西之最様(模様)必意三四年内ニハ干戈を勸候もの相見江
 候、夫迄者人口ニ系り不申様、無左候而者、此後皇国輔全之策者不
 被行、残念不少、又者大坂林乾大和森田北并亡命生三浦生怨恨者如
 何とそ和解緩々計策希旨、此後五報国之障ニ相成可申者、五畿内ニ
 て此もの共ニ候間、此上之障ニ不相成様松田生示合可然計策頼旨、
 尤寛々仕方可然旨、或者不佞事帰国之節段々約定いたし置候事も其
 後病氣ニ有之候処、当時禁錮同様之身分ニ相成、国脈故友之胸中も

相分り申候間、此節山田生帰愈以大坂之事者林乾可奸計三浦か醉
 狂之段相分り候ハ、来春共ハ少し者手も付可申相楽居候、将又
 御紙面御往復互ニ名前切替改名被下、両山参詣人六条肥後宿ニ内田
 手永之もの参り候ハ、念頃ニ頼被下咄出可被下、余便者恐敷余者
 不言候、且未天下之事体相見不申、天下之大義を講習届不申候間、
 大義上候より天下之事体火国武士之弊風等講習被下候上、四五六藩
 も遊歴仕候様勸被下候ハ、帰後此許一方之手助ニ相成候、右者松
 田生ニ御談合被下、余者山田生聞取具候旨認有之候儀を御尋御座
 候処、

此儀昨年か一昨年か之事ニ而、永鳥三平者肥後熊本馬廻り家中ニ
 而、以前心安くいたし候処、此もの世話ニ而大坂医者乾十郎方江
 差置候処、姫路家来三浦孝十郎妻与奸通いたし候儀及露頭候付、
 大坂留守居江申立、於国許蟄居相成候付、其後此もの不通ニ
 たし、三平儀帰山与相認候儀者、於国許蟄居相成候もの者他所文
 通者不相成候掟ニ付、色々名を替文通いたし候儀ニ有之、右蟄居
 相成候後之儀ニ而全無実之罪ニ候間、証人ニ相立具候様頼越候得
 共、相断候儀ニ有之、松田重助(範義)も三平同藩朋友ニ而、重助此もの
 方ニ罷在候節も夫是ニ而□同様之儀いたし罷出、是も当時不通ニ
 而其後江戸勤番後遊歴相願、日数相切レ国許出奔相成、色々名前
 相替行衛不相知候程之不詰りもの故、三平重助より何角申越候得
 共頓着不致旨、尤山田与申者重助之弟ニ而、同藩山田十郎与申之、
 国許跡追参り、同人儀者随分可取用ものニ有之候段申之、三平
 ハ一日千里与申文言者、全十郎京都江兄之跡追参り候義ニ託し遣

シ候文言ニ候哉之旨申之候、

〔右三平書面之内、源次郎申立紛敷候与奉存候儀ハ、素々三平今自分奸通之次第申披之為とハ乍申、松田・山田を賞候儀も時二取而甚大業之事ニ相聞、自然源次郎義深謀計有之候色合ニ候ハ、此条只三平之奸通ニ託し切違候申立ニも被相疑候間、今一応も御尋之上ならてハ是又事情難相決候、〕

〔四之印〕

一 四月六日附、大河原安楽ハ梅田源次郎宛之書面之中ニ、為三郎殿被仰聞候宇和嶋殿之御意之一件、甚珍重奉存候、あの通りなれハむほんニ不及追付本懐相達可申、於私大慶安心無此上与之文言有之候儀を御尋御座候処、

此儀、弘化度水戸中納言様御慎被為蒙仰候節之儀ニ而、大河原安楽与申候者、先酒井若狭守殿之節、家老渡辺権太夫之伯父ニ而、

大河原酒造之助与申候而養子儀出奔いたし候付、終ニ断絶相成候得共、鉄炮打候付、隠居酒造之助事安楽江別段御切米被下、甥渡辺方ニ同居罷在、七八ヶ年以前七拾九才ニ而相果、御国許ニ而ハ被用候人ニ而、此もの儀も信仰いたし居候ものニ有之候処、菊池（重善）為三郎者劍術師範ニ而、水戸様御家来ニ有之、先年水戸中納言様御慎之節、家中之内銘々紀州様・尾州様又者御役人方夫是江無実之段御歎訴ニ罷出候節、為三郎儀者紀州様江歎訴いたし候処、御含相成、又者伊達遠江守殿者水戸様御親類ニ付、右為三郎儀宇和嶋江罷越、公儀江前書之段御訴被下度段願出候処、遠江守殿ハ時節相見合居候様被仰候由ニ而、其頃此もの大津表ニ罷在、（松平慶永、

春嶽者稲葉務人且阿部殿者若州殿より御廻しニ而、同所藩中渡辺権之

進手続有之候儀を為三郎聞付、此もの方江罷越、其頃若狭守殿者所司代御勤ニ付、右之次第前書夫々手筋を以相歎呉候様相頼、折節安楽京都ハ参り候付、右之次第申聞候処書付差出し候ハ、可然旨申之候ニ付、為三郎ハ水戸様御事委細之書付差出、権之進ハ若狭守殿江差上候よし之処、阿部伊勢守殿与者寺社御奉行之節御同役ニ而、以之外之儀ニ付、阿部ニも如才有之間敷、此方ニも若老中ニ相成候ハ、心得居候旨被仰候付、其通為三郎江も申聞候義ニ而、尤謀叛不及トハ全御謀叛与申訳ニ而御慎相成候よし専ラ風聞有之、全安楽心底ニ而ハ伊達遠江守殿之御取計ハ通相成候ハ、御謀叛之御悪名も相晴、御慎も広く可相成与申趣意ニ有之候旨申之候、

〔五之印式通之内〕

一 二月初日、安楽ハ梅田源次郎宛之書面ニ、水藩之秘訣ト相認、右之内ニ先主危難ノ憂ヲ説今也、去歳將軍臨藩亭此時既免一危ヲ失故務移ハ先主也、此無憂此事者菊池氏ニモ説玉エト有之、後御家政万端先主交り、後主遮而退悪進善之政奏ベシ、不然ハ後主ハ尋常之君而非レハ明主也、是拙力再ヒ大一ノ論也、必菊池氏ニモ不可告ト有之、次ニ為三郎殿御書ハ無滞落手被下候趣渡辺ハ申越候、又端書ニも東武江御用御座候ハ、駕ニ乗何時ニ而も可参旨被仰伝被下度与申文言之儀共、夫々御尋御座候之処、

此儀、安楽若州表ハ差越候手紙之様被存、為三郎ハ差出候書類ハ安楽江差出、同人ハ渡辺江差出候、菊池氏ニも不可告ト申候儀者、

全水戸様之御事認候儀ニ付、不可告と認候儀与存候、右者此頃表
向ハ中納言様御慎之儀ニ付而之書面ニ而、余者其筋之便宜認候旨
事情軽く申之候、

(朱書)
「五之印式通之内」

- 一 十一月十八日附ニ而、大河原安楽ハ梅田源次郎宛之書面之内、水府
一件大開幸甚猶又模様承り度旨、万一二も為三郎兄上京等御存知候
ハ、早速為知呉度旨、且端書ニ親族渡辺氏江も御立寄被下候ハ、
一宿願候旨之文言御尋御座候処、

此儀若狭守殿先所司代被為蒙仰候節之頃ニ而、則水戸様広く御成
被遊候間、其段為相知候書面之旨申之候、

- 一 為三郎儀ハ如何被取立候哉御尋之処、

同人儀年齢此者と同年位ニ候得共、大病ニ取合候様子ニ而、其後
被召出、何角江戸ニ而相勤居、此者江戸表江罷越候節一度面会い
たし候得共、老耄同様ニ相成居候之旨申之候、

- 一 其後文通いたし居候哉御尋之処、

安楽儀者其後式三ヶ年相立、若狭守殿江戸表江御免足後同所江罷
越直ニ相果、為三郎も江戸江罷越候儀ニ付、此者ニ用事無之候間、
其後者式々度挨拶状渡辺江託し差越候儀有之候哉ニも存居、勿
論為三郎義者未存命ニ有之候哉与存候得共、睨与者不存旨申之候、
一 菊池与相名乗候者外ニ有之候哉与御尋之処、

菊池与相名乗候もの水戸様御家来ニ沢山有之、為三郎兄弟も有之
候段申之候、

- 一 外同姓之もの江是迄文通いたし候儀可有之哉御尋之処、

外同姓等江之文通ハ不仕候旨申之候、

(朱書)
「六之印式通之内」

- 一 三月廿二日附ニ而、大河原安楽より菊池為三郎宛之書面之内、此月
十八日京着いたし候趣ニ候得共、面会不致、併愚策存付候付進上仕
候間、必御決心早々被行候様進メ之文言、尤丸一年相後レ有之候間、
成丈早ク興行有之候様、早々飛脚被仰遣、江戸之方ハ御同士御進被
仰合候様之趣相認、源次郎方江も得与申含有之、且又一刻も早く御
就国、前中納言様江恐悦被仰上、何角捨置、一日も早く江戸江御下
り可被成与之文言御尋御座候処、

右者先年水戸様御慎ニ付而之書面ニ而、其頃為三郎ハ宇和嶋ニ罷
在、右方江安楽ハ差遣候書面与相見江、其後為三郎此者方江罷越
残し置候儀ニ而も可有之旨申之、全水戸様御広く御成被遊候様之
策書存付候儀与相見江、早々江戸表江行ケ与之儀ニ可有之、何分
年数も相立候儀ニ付、此者江申含之儀ハ覚不申、且是迄此者若狭
守殿御用ひ無御座候儀ニ付、安楽より水府ニ不限、兼而他侯江被
抱候様申進メ、既此書中ニも其辺之義有之候哉与存候、右者此者
儀兼而若狭守殿ニ者格別蒙御恩候儀ニ付、外藩ニハ不相成候心得
之旨申之候、

- 一 右書面ニ阿部平六与申もの二見セ候与有之、平六者何れ之もの二候
哉御尋之処、

(宗睦)
平六儀者若州ニ而用人格之ものニ有之候之旨申之候、
「右安楽之書面、都而水府一条与申候廉顕レ御座候付、御尋之趣者奥

- ニ相認置申候、」

〔六之印式通之内〕
〔朱書〕

一 三月廿七日附二而、安樂今為三郎宛之書面之内、源次郎方委細申聞、
昨今御左右相待心二悦居候与之文言御尋二御座候処、

此儀前書同様、水戸様御慎一条二付而之書状之旨申之候、
〔朱書〕
〔七之印式通之内〕

一 七月六日附、横井平四郎〔時存、小楠〕梅田源次郎宛之書面之内、名古屋ハ流石

大藩二而、三五之人才有之、彦根ハ丁度参り着候節ハ一兩日中二御
下国之筈二而、殊二騒ケ敷与認有之、又者岡田・三寺〔準介、信〕より人ハ五六
〔三作、大木本弥〕

輩も有之、先ハ起国二相違無御座、水戸一条是又得与咄合、吉田列
了簡承り候処、重々念頭二相掛ケ可成丈心配仕候志者決而疑惑無御
座、御安心可被成候、尤今日之処弥以静り居可申候勢二而、其中二

も手の付られ候丈ハ勿論、付ケ申候了簡二御座候旨認有之、且加賀
藩十日斗逗留いたし、同藩中田中専次与申もの二出逢候儀等認有之
候儀御尋二御座候、

此儀肥後与福井ハ御代々格別之御別懇二而、殊二当時者御親類之
御間柄〔是容〕二有之候之処、横井平四郎ハ肥後藩中二而部屋住之時分、

長岡監物差図を請、国風為承式拾四五ヶ国も遍歴いたし居候内、
京都二逗留中心安いたし、其節之福井より差越候手紙二而一旦国

許二罷帰り家督相成、当時二而者九州之老人与申程之もの二相成、
越前殿〔松平慶永、春徳〕前書之続を以肥後殿江御頼二相成、儒学教授二付当夏頃
より福井江罷越居候旨申之候、

一 吉田・岡田者何者二候哉御尋之処、
此儀吉田〔東徳〕悌藏与申福井之儒者二有之、岡田与申ハ悌藏之弟順助与
〔準介〕

申同家中之旨申之候、

一 六七輩も有之起国二相違無之、水戸一条是又得斗咄合与申儀御尋御
座候処、

此儀全体平四郎来状者、先年水府御故障済之後到来之書二而、最
早水戸一条者相済有之候得共、平四郎儀不存、福井藩中二而念頭

二掛ケ居候与申候事二有之、水府一件右以前京都二而菊池ハ此者
江相頼候段、長岡監物江相咄シ候処、同人も外ハ被頼居候旨二而、
福井二も此者心安先キ有之候間、平四郎申条心頭二掛ケ可申旨二
而相済候儀不存差越候手紙之旨申之候、

〔右品々申摺候儀二付、今一応御尋御座候方与奉存候、〕
〔朱書〕
〔七之印式通之内〕

一 十月朔日附二而、横井平四郎ハ梅田源次郎宛、全諸国遍歴之書面之
中二、水府両奸御退之後者如何成行申たる哉一向二承り不申、景山
様小石川御屋形御殿者未出来不申哉、其外一体之様子承り度旨認有
〔徳川齊昭〕
之候文言御尋二御座候処、

此儀是者前書之続二而、先年福井ハ罷帰り候上、熊本ハ差越候手
紙二可有之、水戸一条両奸御退後与申儀者、同御藩中結城虎次御
〔貞寿、朝道〕

退ケ後与申事二可有之外、老入者覚不申候旨申之候、
〔右平四郎書面差出候右式通之内、水府御故障一条之廉書状頃合前後

いたし候哉御尋御座候得共、此廉跡二而到来仕候段手堅申立、左候
ハ、申口紛敷候旨御尋御座候処、彼是不取留儀を申飭り押包候体二
申立候儀、如何与奉存候、〕

〔八之印〕
〔朱書〕

一 十月十日附二而、永鳥三平（云）梅田源次郎宛之書面、養父方二而禁錮罷在候様子二而、中二者波多野生事其地逐捕も難斗、若当時帰候ハ、極刑ニ被為処候様子二付、暫時姓名を易潜伏仕候様取斗呉候様頼旨之文言、又者林乾波一件跡二而毒を流し候ものと相考候杯と有之、或江戸之方少ハ打易候乎、水府之最様如何、又者長崎之様子切齒無申斗奉存候杯与認候文言御尋ニ御座候、

此儀者前書ニも申答候通、大坂ニ而之奸通一件之旨申之、水府之最様如何、長崎之様子切齒無申斗存候杯与申儀者何角不取留儀相認越候儀ニ付、返書も不差遣捨置候旨、尤水府之儀者前中納言様御高名を慕、西国儒者者いつれ茂尊敬仕、毎度書中ニ御噂申越候儀之旨申之候、

〔九之印〕

一 すましへぬ水にこの身ハしつむとも 濁しハせしな四方の民草、御製与認有之候切紙、浪人之身ニ而何故所持罷在候哉、御尋ニ御座候之処、

此儀京地ニ而者専ラ承知仕居、若州（云）も申参り、其外此もの方江参り候、夫是医者杯も申居候付、写し置御製之真偽ハ難斗候得共、全予ハ水ニ沈ム共民ハ濁さぬ積与申思召かと存候旨申之候、

〔拾之印〕

一 保済秘録ハ心得居候哉御尋ニ御座候処、此儀奥書之儀者自筆ニ相認候儀ニ而、先年水戸前中納言様御慎之節、菊池為三郎歎訴之儀、且此もの江談候書類ニ相違無之候旨申之候、

〔一〕（朱書） 此間水戸一条与申儀何等之儀哉御尋有之候之処、長州国産交易之儀ニ而も可有之哉ニ再応申立置、今日御尋御座候書面之答与者相違いたし候儀如何之旨御尋ニ御座候処、此儀此間御吟味之節此節之御事ニ而も被仰候様存候付、国産交易之外心当り無之段申上候旨申之候付、仮今年数相立候共、中納言様御慎之儀ニ付、格別骨折候儀与相見江候上者、右等之儀も委細此間可申答答之処無其儀段、如何之旨御尋ニ御座候処、

〔此儀恐入候旨申之候、〕

右之通申立候様奉存候付承書仕、猶又源次郎申口紛敷候廉等之儀者御沙汰之通朱書ニ相認申候、以上、

午十月朔日

十月二日 元小浜藩士梅田源次郎定明吟味申口

午十月二日、梅田源次郎所持（云）雜持書類之内を以、御不審之廉御吟味御座候付、源次郎申立承り書

覚

〔丸之印〕

一 名当不相分、未文切有之候書面之内ニ、水府君（末）賤闇ニ而善道ニ移候心なき時者同志いかん共可助筋無之、不得止事、浪人ニ而相果候ハ

外無之旨、且又御隠居様之危難者決而無之、私忝人請合申此段忠臣御連中江申度との文言ニ有之、急々與認候所未切捨有之候之儀御尋ニ御座候処、

源次郎申口

此儀安楽否此者江拾ヶ年程以前ニ差越候手紙ニ相違無之、右者先年水戸様御慎一条ニ付而之儀ニ有之候旨申之候、

一 水府君瞑闇与申者、当中納言様其頃御若年ニ付、御家中結城虎次杯之讒者之為ニ御迷被遊、御親子被為在御不和候付、銘々浪人ニ相成、夫是江歎訴等いたし候、浪人共対して之同士与申儀ニ有之候旨申之候、

一 私忝人御請合与申儀者、安楽見居之權式を認候儀哉之旨申之候、
一 忠臣御連中与申者、菊池同士之もの江知らセ呉候との文言之儀ニ有之候旨申之候、

一 菊池同士之者与申者いつれ之ものニ候哉、源次郎儀も素合同士忠臣連中与申内之積ニ而、安楽右申越候意味ニ可有之哉与御尋御座候処、

此儀水府ニ而者御側用人藤田虎之助・儒者藍沢常藏(藍沢)等之事ニ而、夫等を同士連中与申候事与推察いたし、此もの儀者同士忠臣連中与申儀ニハ無之候得共、素々保済秘録之書面を若狭守殿江渡辺を以差上、水府御故障ニ付一旦心配仕候儀ニ付、水戸様尊信ハ仕居候旨申之候、且水戸様御故障一条ニ付而、素々公儀ニおいてハ鳥居(羅藏)甲斐(羅藏)初ハ重キ御役人方等を讒訴いたし、終水戸様御慎ニ相成候様讒いたし候旨、水府ニ而ハ其節専ら申居候旨申之候、

一 急々与申候処未之文言覚不申旨、尤継手ハ自然ニ相離候哉与被存候旨申之候、

〔書面之外〕

一 保済秘録与ハ此もの存寄ニ而書銘いたし候旨申之候、

〔書面之外〕

一 京地ニ而懇意之もの者、いつれ之ものニ候哉与御尋御座候処、

(青蓮院尊融入道親王)
栗田宮家来

伊丹藏人(重賢)

花山院殿内

雨森京助

梁川星巖(孟緯)

京高倉六角通下ル

籟(頼雙)三樹八郎

右等之ものハ別懇ニ而、其余若州家来ニ親類等有之、此外者所司代御組町御奉行組等ニも心易先等此者儀有之候得共、京地儒者等者余り懇意不致旨申之候、

〔書面之外〕

一 大坂表ニ而懇意ニいたし候ものハ、いつれ之ものニ候哉与御尋御座候処、此儀左之通、

遠州浜松大坂蔵屋敷
留主居

岡村李之助伴

悌次郎

西洋流炮術直伝師範罷在候、

御城代

土屋采女正殿家老

奥田図書

此もの廻縁元若州藩の養子、

同

公用人

大久保要人

兵学儒学ニ而高名ニ付、兼而承り居候得

共、当七月始而面会いたし候旨申之候、

大坂御具足奉行

織田又蔵

大坂江戸堀三丁目

問屋

村嶋屋市兵衛

長州産物取扱いたし、長州江御出入罷在、

表名前者長兵衛与申者ニ而、市兵衛ハ此

者親類之旨申之候、

此儀雨森京助の手ニ入候旨申之候、

堀田備中守殿(正廳)言上并御勅答書写巻通

此儀、知ル人信州久志村の京地江參合居候蒼生岡村弥惣八の手ニ入候旨申之候、

二月廿三日附之勅書写巻通

此儀梁川星巖・籟三樹八郎歟之内の手ニ入候旨申之候、

堀田備中守殿・本多美濃守殿の書付巻綴

此儀梁川星巖・籟三樹八郎之内の手ニ入候旨申之候、

間部下総守殿御上京ニ付、前以之勅書写巻綴紙数三枚(詮勝)

此儀伊丹蔵人の手ニ入候旨申之候、

右之趣相答統而申立候二者、去ル十一日御尋御座候御独断与申候書面相認候儀者、全此勅書御差立之儀蔵人の承り候故、此者書面ニ御独断之儀認遣候旨申之候、

「此儀、此上之処ハ御写之御秘書を以、猶又御押口ニ被成候ハ、源次郎手重ク認候廉も可顕候哉与奉存候得共、猶追々御吟味之思召も可有御座候哉、夫故態与申立其俣御聞掛ニ被成置候御儀与奉存候、」

「拾貳之印」(朱書)

一 松平肥前守殿・井戸石見守殿・細川越中守殿等被仰出写巻通、何れの手ニ入候哉与御尋御座候処、

此儀六ヶ年程以前、浦賀江亜墨利加之參り候節、其頃此もの江戸表ニ罷在、同所ニ而手ニ入持帰り候処、越中守殿之御書者真意之由ニ候得共、肥前守殿之儀者同藩之ものニ相見七候処、全偽物之

「拾壹之印」(朱書)

一 官武之風説書品々所持いたし居候内、久我殿・徳大寺殿の勅諭并勅答書写巻通、何れの手ニ入候哉御尋御座候処、

由申居候旨申之候、

一 重墨利加使節申上書

此儀江戸長州屋敷の京同留主居屋敷江相廻り、右留主居屋敷の手

二入候旨申之候、

一 堀田備中守殿御役宅ニ而重墨利加使節応接書

此儀秋良(致之助、貞温)厚之助の借請候様相心得罷在候旨申之候、

一 かびたんの差出候書付写巻綴

此儀若州藩中行方(正言)仙三郎儀、西国遊歴いたし帰り掛ケ、於大坂信

州上田家中持居候を借請、村嶋屋長兵衛用場村嶋屋市兵衛方ニ而

写持帰り候由ニ而、此もの貴請候旨申之候、

〔(朱書)右書冊奥書ニ、素星巖の差出清水豊田与申もの江相廻り、大久保の

江戸掘用場江出候様之訳書相見、素々源次郎儀星巖与ハ懇意之間柄、

同人所持之品大坂江出候儀、大坂ニ而大久保源八郎知る人ニ有之、

右用場与申ハ長州産物取扱人市兵衛之住所ニ而、夫迄之手ニ渡り候

書冊を仙三郎儀借請、態々源次郎方江持登り候儀、余り廻り遠き申

立星巖の直請取之儀差支候哉、又者大久保只用場等ニ而請取候儀ハ

差支候与存候而、源次郎右体申立候哉、是等申口紛敷相聞申候、

一 浪人之身分ニ而何等之為ニ右様ニ書付所持いたし居候哉、御尋御座

候処、

此儀京地其外諸方江相廻り、畢竟此もの心得迄ニ所持いたし居候

旨申之候、

〔(朱書)拾三之印〕

一 七月十五日附、梁川星巖の梅田源次郎宛之書面之内、彦根弥上京火

急ニ話度儀有之趣ニ而、三樹八郎同道午後可罷越旨、且一刻ヲ争之

一事之旨有之候文言、御尋御座候処、

此儀当年之事ニ而、彦根殿御上京之旨専ら流布有之候処、同家老

岡本半助与申者ハ星巖弟子ニ有之、全体星巖弟子儀者彦根殿藩中

ニ多く有之、既右半助の星巖江御上京之旨申越候処、星巖儀存候

ニハ、猶又堀田殿同様御上京之上何之甲斐も無之様成行、却而御

不調法等出来候而者恐多くと心配いたし、此者江も可及談与存候

心組ニ而呼寄候哉ニ候得共、其頃無扨差支、三樹八郎を差遣、此

もの儀者不参いたし、若不参候而不叶儀ニ候ハ、可罷越旨申置候

処、差而心配之義ニも無之旨、三樹八郎帰宅掛ケ此もの方江立寄

申之居、其後御上京ハ虚説之旨同人申之候付、其俣ニ差置候旨申

之候、

一 彦根殿不容易御上京心配いたし、星巖儀此者呼寄如何可致心組ニ候

哉、尤星巖杯ニ而如何取斗候積ニ可有之哉と御尋御座候処、

星巖存寄之儀者相心得不申候得共、兼而星巖儀者右体之事を自身

ニ引請心配いたし、夫是江(馳)駈走いたし候もの故、既此度間部殿御

上京ニ付而も、御家来江御心添も仕度杯与申居候氣質ニ付、全彦

根殿御上京深心配いたし候故、此もの江も申談候積リニ候得共、

何分此もの者其節相断不罷出候段申之候、

〔(朱書)右者星巖壺人之取計ニも無之、源次郎江相掛り可申談積り者源次郎

ニ手筋有之候而之事故哉、今一応御尋御座候共、何レ死失之星巖之

儀故、源次郎儀者同人江託(託)し候哉ニ奉存候付、今一応御勘考を以御

吟味之方ニ候哉与奉存候、

〔拾四之印〕^{〔朱書〕}

一 名前不分、此度夷情切迫之儀ニ付存寄申上候次第書卷綴、何故草稿同様ニ持居候儀御尋御座候処、

此儀、当二月頃大坂ニ而秋良厚之助（直義、謙山）借受、此者門人長州藩中平井幸助与申ものニ為写置候書ニ而、此者自筆ニ而者無之、尤昨年今世間ニ流布いたし、専ら水戸様御文之由申之候得共、文儀心得居候もの者偽書之旨申之候付、難相分候得共、此者おゐても水戸様御作之文体与者難被存候旨申之候、

〔拾五之印〕^{〔朱書〕}

一 八月十九日附、近藤退藏（直義、謙山）梅田源次郎宛之書面之内ニ、達生図説以御蔭成就与申事有之、右ニ付北村氏・野田氏江之伝言有之、兼而出来上り之上者黄泉一見与存居候杯之文面有之、奥ニ水戸様・尾張様・福井様等之悪事露頭とも申、紀州様家老江州之大指等之方が密（計）斗ナド、何か諸説粉々ト仕候、治か乱か不解恐入罷在、竊ニ思先生ヲ只々朝廷御用イ遊候事之出来申候次第も有之時者、不遠而平治可仕筋ニも可有御座候哉与歎呼仕居候杯与申儀、其外賀川・中山より少ハ増与認有之、且ハ、しほりをひて茂り生ケリ菽す、き有て甲斐なきむさし野之原、右者此頃之御製とか承り候段文面ニ有之候付、御尋御座候処、

此儀当八月之事ニ而、近藤退藏者若州之藩中産医ニ有之、乍隱居別段被下物等有之、達生図説と申書物ハ此もの著述いたし産家之書物ニ而、此もの右書物之世話いたし候礼状ニ有之候旨申之、尤退藏儀者此もの今世問世話を受候ものニ付、此もの儀を至而信仰

〔拾六之印〕^{〔朱書〕}

いたし居候故、朝廷御用被遊候ハ、平治之旨相賞認候儀ニ而、同人者此頃京住相願居候得共御聞届無之旨、且江戸表之風説承り候俣、為心得席ニ申越候儀ニ有之、御製之儀も専ら京都ニ而も流布いたし、何れも不取留儀ニ有之候旨申之候、

一 北村・野田儀者京都書林之旨、賀川・中山ハ京都産家之医者ニ而有之候旨申之候、

〔拾七之印〕^{〔朱書〕}

一 日附名前等不分、未切捨有之候書面之内、一昨日（正弘）追々御便り御座候趣老中江咄し置、昨日急御直飛脚江戸（評内）參着、道中彼ノ早打之沙汰も承り不申、江戸表水老様・阿部殿御半知ニ可相成、水戸様も御三卿之様成ものニ御成可被成、此節江戸水道専ら御吟味之最中与申事、水老様御手先ニ而鈴木藤吉被召捕候杯、且者水老様御毒飼之風聞専らニて、御国江御入り可被成候与申事杯風聞之旨、其外共江戸ニ而之風聞相認、奥ニ而切捨有之候儀共御尋御座候処、

此儀当八月下旬之儀ニ而、若州藩中松田美濃江（秀徳）參り候手紙ニ有之、全内用ニ而も奥ニ認有之哉、切捨前文文壺（評内）孫兵衛江相送り候旨ニ而、同人今此もの方江相廻り、彼ノ早打之沙汰与申者、御所（評内）江江戸江之御飛脚之儀ニ而、此間御吟味之節申上候手紙之旨申之、全江戸与上方与風聞相違ニ付申越候儀ニ有之、尤孫兵衛（評内）今其節添書も差越候旨申之候、

〔拾七之印〕^{〔朱書〕}

一 源次郎手跡之書付文面之内、大和産物交易之礼ニ、天朝江御忠節相立、拙者皇国之御為ニと奉致、寸忠も相立難有杯認有之、且大和国

中武二志有之、中二も十津川者將軍家ノ御加勢被仰付候趣文言ニ有之、右ニ付武芸何ニ而も一芸得候もの十人斗も登し呉候様之儀ニ而、御主君様江も被仰上被下度との儀、且又大守様京師ニ而信シ候付、安心いたし候様之儀、又者来春御帰国之節者京師江御立寄被遊度、天朝ニ於而も方今之時節故御安心可被遊、夫ノ大和御先祖御廟・東大寺江御参詣被遊度杯相認有之文言、御尋御座候処、

此儀長州江可遣与存認掛置候得共有之候処、兎角十津川難郷故、墓々敷無之、其俣ニ書面差置候旨申之候、

一 別紙ニ男女人別又者軍士頭分杯認有之候儀者、如何之候哉相尋候処、此儀兼而十津川郷者家々ニ而軍士頭取等分り有之、天下晴有之候儀ニ而、此度異船御加勢ニ付右村世話いたし居候儀ニ付、此者所持罷在候旨申之候、

一 十津川郷人別書ニ、軍士頭分杯与相認候儀ハ如何之訳哉相尋候処、此儀十津川儀者、先年ノ由緒を以、重立候百姓之内軍師頭分之名目有之候旨申之候、

右之通申立候様奉存候付承り書仕、猶又源次郎申口紛敷候廉等之儀者、御沙汰之通朱書ニ相認申候、以上、

午十月三日^(三)

十月三日 元小浜藩士梅田源次郎定明吟味申口

午十月三日、梅田源次郎^(雲浜、定明)所持雜物書類之内を以、御不審之廉御吟味御座候付、源次郎申立承り書

覚

〔朱書〕
「卷之印」

一 五月十一日附ニ而、久坂玄瑞^(通武)ノ梅田源次郎宛之書面之内、桜任蔵^(真金)

之処相尋候処、大目付御目付之間ニ正論家有之与申事ニ候、先生

江宜申呉候との事御座候与相認、其余ニ幕府ノ赤心御尋ニ付、尾^(徳)

川^(慶應)侯御英明之由、米沢^(米沢、上杉齊憲)・酒井雅楽頭^(忠順)・酒井左衛門尉、是侯など、

尊王之儀而已格別、其外ハ確論諸侯も無御座由、此度我公上京之由杯与認有之候文言御尋御座候処、

源次郎申口

此儀当年之事ニ而、久坂玄瑞と申者長州家中ニ有之、尤若輩ものニ而医道為修行当五月頃初而江戸江参り掛ケ京都江罷越、此もの方江立寄候儀ニ候而、兼而長州九州路ニ而者関東之比判^(批)いたし候癖有之、夫等ニ付江戸表風説認越候儀ニ有之、長州殿者御交代先^(毛利慶親)例御上京可有之儀当前ニ御座候処、右之趣申越、勿論玄瑞儀者兵学を心得居、強氣成ものニ有之候旨申之候、

一 桜任蔵儀者一昨日申立候通、未夕面会不致もの之旨申之候、
〔朱書〕
「式之印」

一 四月廿七日附ニ而、邇聴深密と題し候書面之内、初者西丸様之議論何れ共不決、帝徳之薄厚ニ託^(託)一橋様^(徳川慶喜)・紀州様御両君之説を比判いたし、猶又井伊殿御大老之御趣意を認、虜使江応接案内容易相濟候^(直廻)

由之風説、又者詔之俣相廻し候て加・薩・越前等事アラントスル国江八游説ヲ入レ、関東之御趣意ニ説付ントスル様子と相認、或長州侯者是迄格別激論者無之故、関東二者大ニ輕シ、右之策も施し不可申乎と申候、不施コソ幸也、此時一トキバリ正論を發し、天下之人心を惑發致させ度事ニ御座候、此レ等完翁等江幾重も被含被下候様奉願候杯認候文言ニ付、御尋御座候処、

此儀(赤柵)赤根武人儀、当年江戸表分差越候書面ニ而、外手紙与一緒ニ差越候付名前無之、長州侯者御穩順ニ付、藩中ニも主人を譏候者も多有之、尤長州者格別之御家柄ニ付、穩ニ可致旨公儀分御達者有之間敷与申儀ニ可有之、天下之論義杯長州之倍臣(陪)もの武人之如き若輩もの之著説二者無之、於長州者先予隊与申候而、藩中強氣之組有之、全右等之内より出し候説ニ而可有之哉、勿論正論を發天下之人心感發之説不容易、可及儀ニも無之、不存寄事共之旨申之、尤完翁与八京留守居完戸九郎兵衛之儀ニ有之候旨申之候、

一 右書面完戸九郎兵衛且長州国許江も相達候哉、御尋御座候処、此儀完翁江通シ呉候様認有之候儀ニ付、九郎兵衛迄者相見セ候得共、其外江ハ差出不申旨申之候、

一 此書面者、一昨朔日御吟味御座候武人書面ニ相添差越候儀之旨申之候、

(朱書)「右書面打合候処、同月日ニ相違無御座候、併武人儀者源次郎申立通り若輩与申、頓着難被致候ものとも相聞兼申候、」

「三之印」

一 (佐久間象山)啓分星巖宛之書面之内、先年異船渡来之節、罪を受虜屈候与認有(梁川五藏)

之、附而者詩作等有之候儀御尋御座候処、

此儀、啓者佐久間修理与申高名之ものニ而、信州松代之藩中ニ有之、此もの儀兼而名前者承り居候得共、面会不致文体不存、星巖者懇意之旨承り居候付、同人ニ出逢候節其旨咄候処、星巖分爲見呉候書面之旨申之候、

「四之印」

一 五月十日、出東分先生与宛有之候書面之内、申度儀沢山有之候得共、當時勢と而者却而悪敷候間、飛脚便り江者申兼候旨認、又者ア人心能下田表江引取候付、当夏ハ大坂冲江異船余分来り候事も可有之事与相考候、其時者京都飽迄強ク静ニ仕度心中祈居候事杯認有之、且者此上も東ノ白ミ候迄善キ役人与内談いたし居候、是ニ付而も追々蒙御蔭候事有之候旨、又者日々英士ト附合、入用損毛多ク心痛仕候得共、天下之少シ御爲ニも相成候心得ニ而罷在候旨、且大森表江も折々罷出炮術も仕候、是茂深キ事有之候、公辺江茂名出候、入用御賢考奉願候与有之、且西洋好望ト申触し不申ば相成不申事有之候間、無抛仕候事与認、武人子ト懇意仕候、少シ年若ニ而残念ニ御座候、端氣能く氣長申入候、御安心申上候、(赤根雅平)忠右衛門殿頼敷事ニ候与有之候文言御尋御座候処、

此儀当年之様存居、建部内匠頭殿家来大高予左衛門之手紙ニ有之、右者素々京都住竹内東伯儀手引ニ而、此もの懇意ニ相成草具足之上手ニ有之、兵学もいたし至而強氣之事而巳申居候ものニ而、筆まめ成ものニ付、多分虚説多く候得共種々之儀申越候、先年在京中此もの知る人松坂屋清兵衛与申もの之本家与兵衛分

借為出候金七拾両、此もの世話を以借遣其俣相滞一昨年秋頃(大高義郷)の

江戸勤番ニ罷越居候付、東と有之、予左衛門父六八郎儀者、

先年重墨利加渡来ニ付上書いたし蒙御賞、予左衛門儀も上書い

たし候程之ものニ付、江戸ニ而之風聞且同人古風儀之もの故人

ニ被除居候処、宜氣之合候御役人出来候儀ニ相聞、兎角製作ニ

付而之入用損亡多候之儀ニ而、前書借財之断等相認候儀ニ可有

之、忠右衛門と申ハ赤根武人之父ニ而、浦鞆(元襄)方江参り候もの

之儀ニ付心安いたし候儀与存候旨ニ而、外ニ子細有之候書面ニ

而ハ無之、尤予左衛門弟又次郎(大高重秋)与申ものハ製作上手ニ而、当時

京住罷在候由申之候、金子借入恩儀を存江戸之風説巨細ニ申越

候得共、此ものハ用向之外書面差出不申候旨申之候、

〔四丸之印〕(朱書)

一 森川東(梅田ノ旧姓)今矢部源次郎宛之書面式通、別段御不審之文面ニ無之候得共、

森川東者何ものニ候哉、御尋御座候処、

此儀森川東者若州藩中ニ而江戸詰ニ有之、此もの儀拾七才之節到

来いたし、右東之高附弟ニ有之候付大切ニいたし、書面残し置候

旨申之候、

〔五之印〕(朱書)

一 八月廿三日附、吉田清兵衛(兼次郎、義方)今山口董次郎宛之書面之内、明日者御留

守居様方御催、貴家様江御入来之由、下拙共も御供可仕様被仰下候

得共、病氣ニ付断候旨之文言、且右手紙何故源次郎所持罷在候哉之

旨御尋御座候処、

此儀山田清兵衛(吉)与申ハ、松坂屋清兵衛之儀ニ有之、右清兵衛儀者

縮緬問屋渡世いたし居、山口董次郎与申者城州川嶋村之ものニ而、

兩人共長州産物世話扱人ニ有之、此ものハ届呉候様申越候処、折

柄董次郎儀此もの方ニ罷在候故開封いたし、其俣残し置候儀ニ有

之候旨申之候、

〔六之印〕(朱書)

一 九月廿一日、赤根武人の梅田源次郎宛之書付ニ而、書籍類返却猶又

武人の預ケ之書付御尋御座候処、

此儀昨年九月武人江戸江参り掛ケ、以前此ものハ借置候書籍類及

返却、猶又武人所持之書籍類此もの預り置呉候様、長州京留守居

屋敷より差越候節之書付ニ有之候旨申之候、

〔七之印〕(朱書)

一 九月十一日附、半井春軒(議)今梅田源次郎宛之書面之内、幕儀も余り不

承、朝議如何承度候、私主人も此度上京有之様子ニ而、一段之事与

欣喜仕居候与有之文言御尋御座候処、

此儀(中)中井春軒ハ、長州医家ニ而朋友与申ニ而者無之、若輩者ニ而

劍術杯を好ミ、医道為修行当五月初而江戸表江参り掛ケ、此もの

名前承立寄候儀ニ而、江戸表江罷越同所ハ差越候手紙之旨申之、

長州殿御上京之儀者、先書ニも有之候通ニ候旨申之、何分春軒儀

藩中之身分ニ付心配いたし候ハ風説承りたき心体(底)ニ候哉之旨申之

候、

〔八之印〕(朱書)

一 九月七日附、春洞(松本為藏)今梅田源次郎宛之書面之内、呈書相認候処母ハ書

状参り、母ハ無事之便りニ而安心仕候与有之候文言御尋御座候処、

此儀春洞与申候ハ、松本為藏与申京堺町二条下ル町ニ罷在長州殿・防州徳山殿等(毛利元番)ニ因縁有之候ものニ而、長州産物取扱罷在候処、

丹後田辺藩中牛田惣右衛門与申もの産物之内塩直安ニ買請度旨申談候付、右為藏方江引付遣、其後同人儀防州塩浜江参り居候節之儀ニ而、呈書与申候ハ此もの江可差越手紙之事ニ有之候旨申之候、

〔朱書〕
「九之印」

一 五月廿四日附、渡辺健藏ハ福田肇与宛有之候書面之内、墨夷一条も兎角不堪慷慨事而已出来候、昨冬登城以来壱人之風説、天朝ニハ大ニ逆鱗被為遊候趣、何卒只今迄之因循背且之風一変致し候様、日夜祈念致居事ニ候、貴君者如何京師辺之御様子共御聞及之儀も被為在候ハ、被仰聞被下度与有之候文言御尋御座候処、

此儀、渡辺健藏ハ越後之百姓ニ而郷土同様之ものニ有之、健藏儀者此もの未面会不致候得共、健藏父多惣次ニ者先年面会いたし、其後健藏儀も折々書面差越、福田肇者東江州彦根殿御領下之ものニ而医業罷在、此もの知る人ニ有之健藏・肇者同学之ものニ付互ニ懇意罷在、此者方ハ届呉候様頼越候書状ニ付、此もの妻江申付置候処、思話敷便り無之候故、其俣延引相成候旨申之候、

〔朱書〕
「拾之印」

一 八日附、内蔵之進(村嶋)先生与斗之宛書面之内、鉄炮壱挺頼候旨認、且此度払物慥ニ有之、十津川上平調度由、五条御役所拝借願立被成候儀申入、同苗長兵衛出金可仕儀、右様成品ゆへ実者上ヲ恐入断立、実意を以世話仕候而も疑念を請候も不宜、堅相断申候間、先様江可然様御断立宜奉存候与有之、末文ニ舟一条御世話申入候付、又々下

坂可仕候与認有之候文言御尋御座候処、

此儀当六月頃、村嶋内蔵之進ハ此者江之書面ニ有之、右者所司代与力和流之拾刃鉄炮払度旨此もの江噂有之、兼而此もの十津川世話罷在候付、上平与申もの江申聞候処、買請度旨申之候得共、貧地之儀ニ付五条御役所江拝借金相願候得共、御聞濟不相成候付、村嶋長兵衛与申もの江出金相頼候得共、不外成品ニ付、出金致兼候旨ニ而相断候付、内蔵之進倅稽古之為壱挺丈買度旨申越候儀ニ有之、船一条之儀者長州産物世話いたし居候もの之儀ニ付、此度同家老船一艘於大坂作り度旨ニ而、内蔵之進被相頼候儀ニ有之候書面之旨申之候、

〔朱書〕
「拾一之印」

一 五月廿九日附、野々口十郎ハ梅田源次郎宛書面之内、矢師忠左衛門江征矢之直段相尋候儀、且竹斗ハ断呉候様申候儀、并川崎白銀屋江鉄太刀鉄具直段等尋呉候様頼遣候処、竹斗者断候返事ニ相見江候文言之書面御尋御座候、

此儀当年之儀ニ而、野々口十郎ハ若州家来ニ有之野々口四郎(為久)之次男ニ而、医道儒学剣術等為修行長ク京地江参り居、当春頃より国許江罷歸り候節、此者長州ハ鶴羽一羽分賞請、尤此者弓術も少シハ相心得候付、龜矢式拾本斗拵度、若州之矢竹ハ品宜候間、同所ニ而竹相調、羽根不足ニ候ハ、長州ハ手廻り可申候付詔可申哉与存、忠左衛門儀ハ若州ニ而矢師之上手ニ付、直段尋見呉候様頼置、且又此者毎度他所江罷出候儀ニ付、手丈夫之刀拵度与存候処、幸若州ハ鉄具ハ上品ニ有之候間、是又白銀屋江太刀作之鉄具直段尋

之儀頼置候処、夫々委細申越候返事之旨申之候、

一 浪人之身分ニ而征矢之積書取寄、弓ハ如何可仕存心ニ有之候哉、右者何れ(*)被相頼候儀ニ候哉与御尋御座候処、

此儀又々進物ニも可相成品与存、前書鶴之羽貫請候より心付候儀ニ候旨申之候、

一 別紙白銀屋嘉兵衛之直段書ニ、太刀鉄具拾組ニ付何程与有之、何故右体沢山成積書ニ候哉、右者全余人之被相頼候儀ニ可有之候哉与御尋御座候処、

此儀余人之被相頼数相詛候儀ニハ無之、全此もの指領一刀丈ケ相尋候儀有之、何故拾組与相認候儀哉寛不申、全縁頭等揃江拾組ニ相成候与申訳可有之哉之旨申之候、

一 此もの毎度他所江罷越候共、儒者之身分ニ而太刀作之鉄具注文不相応、其上積り書之趣此もの申立と者不都合ニ者有之間敷哉御尋御座候処、

此儀別段御答不申上、只白銀屋如何相心得候哉与而已申之候、
〔(朱書)右者自然無扱先之征矢数太刀等源次郎被相頼候故、不都合之御答仕候儀ニ可有御座候哉、何歟不審ニ奉存候、〕

〔(朱書)拾式之印〕

一 六月八日附、大高予左衛門之梅田源次郎宛之書面之内、先月廿日頃之大小不順ニ付、乱相之元ニ御座候杯認、端書之内ニも竹沢寛三郎与(新田邦光)申もの軍法年若ニ候得共、後ニハ出来可申杯与有之、江戸其外諸侯を評し、薩州者当時之軍者ニ相見、殿中江金錢ヲまき候事土砂之如ニ候故、人口ヲ防キ内々交易致有之候事も人ニ何共不申事ニ候、極

内申上候与有之、其外秘伝事者帰国之上可申杯認候文言御尋御座候処、

此儀、当年差越候儀与存候旨申之、予左衛門儀者兵書ニ志一己之了簡ニ而編出し候儀も有之、右等を秘事与申、且ハ同人甲冑製作いたし候もの故諸向江立廻り、何角与演説承り其旨申越、前頭之通父六八郎儀者公儀江上書いたし、松平伊賀守殿之御意も(忠僕)

有之候付、予左衛門儀も天下二人なき心持ニ罷在、乍去、此もの方江ハ全松坂屋金子断可申為、種々風説をも為相知、乱相杯与申候儀者、素々予左衛門儀天文をも学候儀有之候由ニ付、旁右様不取留儀を申越候、且竹沢寛三郎儀者阿州郷士ニ而、其節江戸表ニ罷居、当時者在京仕候旨申之候、

〔(朱書)丸別印〕

一 月日不分、梅田源次郎之行方百太郎江之書面、異見之文言有之、右者何故此もの手ニ残り有之候哉之儀共御尋御座候処、

此儀最前申立候通、行方百太郎儀若州より御引戻しニ相成候砌、同人之上書いたし其段此もの江申聞候付、右体異見申遣し候節之草稿ニ有之候旨申之候、

〔(朱書)別之印〕

一 九月三日附、重臣之梅田源次郎宛之書面、御不快之事被思召、白牛酪式両被下候、保養專一ニ候様御沙汰候也与有之候書面、何レ之到来いたし候哉御尋御座候処、

此儀当年之事ニ而、重臣ハ伊丹藏人之事ニ有之、此もの病氣之儀被遊御聞、栗田宮之白牛酪被下候儀ニ有之候旨申之候、
(青蓮院尊融入道親王)

〔角別之印〕^(朱書)

一 漢文ニ而松坂屋与兵衛之事与有之候草稿忝枚

此儀此もの吹拳を以、松坂屋与兵衛より京両町御奉行所江、当今之御時勢ニ付、御国恩(と脱)して西洋銃式拾挺上筒いたし候付、為御褒

美白銀式拾枚被下置候訳柄、藤森(恭助、大雅)洪助相頼、記文為致候草稿之旨

申之候、

一 破レ書忝枚

此儀、当時京住岸牛山より書面之奥ニ戯之歌書記候前書之端しニ

而、京江戸之与認候書付之旨申之候、

〔拾三之印〕^(朱書)

一 大河原安楽(菊池重善)ハ梅田源次郎宛之書面三通之内、愚策一条為三郎殿江呈

申候間、御出京早々御届被下与之旨、尤謀ハ密なるをもつて為尊杯

認有之文言御尋御座候処、

此儀最前(徳川齊昭)ハ申立居候通、拾ヶ年程以前水戸様御慎一条之儀ニ而、

菊池為三郎儀宇和嶋ニ罷在候処、安楽ハ為三郎江之書状、密ニ此

もの江差出呉候様との儀ニ有之、且別書之分ニ而者、早々上京い

たし候様可申遣旨之書面ニ有之候旨申之候、

〔△別印〕^(朱書)

一 十月十日附、安楽ハ源次郎宛書面之内、小山田氏ハ申參、初而驚

再度之御容体を不承候内者、実のミニ心緒をいたため候旨ニ而、此節

之様子伺申度与有之、且先達之水府藩中一件、尊慮をも何度、為三

郎殿ハ之書状御届被下、実事いか、成行候哉、委承度、其節早々貴

公江書状出申候、御覧被下候事与奉存候与有之、又者公方様水戸御

屋敷江被為成、御防禦之事ニ有之与申由、左候ハ、小石川忠臣も時

を得、野士之軍艦無益ニも相成間敷旨ニ而歎喜之文言、次ニ菊池働

発及候旨有之、将又同人ニ出逢候ハ、立寄候様申呉候様之文言御尋

御座候処、

此儀七ヶ年ハ以前之事ニ而、前頭水戸様御慎広く被遊御成候付、

菊池為三郎儀者江戸表江罷歸り候後ハ、安楽儀此もの方江差越候

儀ニ有之、軍艦之儀者素々安楽ハ器用成ものニ而、同人工夫いた

し候船形拵候儀ニ相見江候旨申之候、

〔拾四之印〕^(朱書)

一 三月廿四日附、水谷勘左衛門ハ大高予左衛門宛之書面、何故所持罷

在候哉御尋御座候処、

此儀水谷勘左衛門儀者、池田播磨守殿用人ニ而、予左衛門儀播磨

守殿江も出入いたし、追々甲冑御用ニ相成候様子ニ付、松坂屋之

借金断之為ニ遣し候手紙ニ有之候旨申之候、

〔拾五之印〕^(朱書)

一 若狭隠士常陸帯与有之候草稿忝枚之儀御尋御座候、

此儀若狭隠士者安楽之儀ニ而、藤田虎(彪、東湖)之進事精之進著述常陸帯之

書ニ、中納言様御若年之節忝貫目筒ニ目込葉被遊御打候儀書載有

之候を、安楽難し候草稿迄之儀ニ有之候旨申之候、

〔拾六之印〕^(朱書)

一 正月廿九日附ニ而、安楽ハ梅田源次郎宛之書面之内、先年上書之写

菊池為三郎江讓度旨、且柳營之製作斗りハ後世大益有之、アノ図無

之ハ御安穩成かたき筋ニ御座候故、其時之為ニ水府公御家上置申度

奉存候与有之候文言御尋御座候処、

此儀前頭之通水戸様御慎之後之事二而、先年柳宮諸御殿向之御建
方之儀、安楽存付之次第并金子御吹替之儀、且水野越前守殿御老
中二而冲乘御製度被仰出候得共、御免し被成候ハねハ異船渡来可
致間不宜旨、附而者、日本ニ紙を御作りニ而外国之金与交易被遊
候而可然旨等之上書写、菊池為三郎江譲り度旨之書面ニ有之、余
事ニ而者無之旨申之候、

〔朱書〕
〔拾七之印〕

一 京地積立米仕法勘定書付壹通、何故所持いたし居候哉御尋御座候処、
此儀当年之事二而、此もの方江罷越候河原町三条下ル八文字屋藤
兵衛与申もの二而、市中之尿を以囲米ニいたし置候ハ、少々
二而茂足シニ可相成与之工夫二而、御役所江願呉間敷哉之旨申之、
其俣此もの方ニ差置候旨申之候、

〔朱書〕
〔拾八之印〕

一 渡辺権太夫〔政奉、卷〕梅田源次郎宛之書面四通之内、晦日附之分ニ、定而菊
池氏御左右ニ可有之与察、開封披見いたし候而御模様致承知、今少
し之処残念ニ候旨認有之、且廿四日附之内ニ、当今諸国政事風俗得
失を記候書、此もの手ニ入候を見度よし、右文面ニ本多孫〔清意〕右衛門方
江差出呉候様相認、端書ニ、大河原安楽儀、当四月七日当地着、五
月廿七日病死之旨申越、又者八月八日附之内ニ、権太夫も秘冊を外
江出候儀可有之哉与甚心配之体ニ認有之、九月廿二日附之内、菊池
面会いたし、一封之分差越、当方模様申越候様紙面ニ候得共、他之
人出入候儀無之、両御屋敷より外江一切出候間無之旨、且者鎗之穂

も頼申越候得共、今使ニ而難出、近日幸便ニ可差越候与認有之候、
夫々書面之文言御尋御座候処、

此儀晦日附之分者、七ヶ年程以前安楽江戸江出立いたし候儀、此
もの不存渡辺権太夫江手紙差出候処、同人儀菊池之一条歟与存、
披見いたし御断書ニ有之候旨申之候、廿四日附之分者、若狭守殿
先所司代御勤役中之儀ニ而、横井平四郎〔時存、小櫛〕拵候諸国政事風説得失を
託〔託〕し候書物ニ而者、右者此もの及見候得共、終ニ右書物出来不
申趣承り候旨申之、本多孫右衛門者其頃若州京留守居ニ而、前書
八日附之分者、権太夫江此もの保済秘録貸置候処、外江相見セ
候由ニ付、不足申遣候付断申越候書面之旨申之、廿二日附之分ハ
拾年程以前之儀ニ而、江戸ニ鎗之穂打候銘人有之候間、菊池為三
郎江戸江罷歸り候ハ、可差越旨約定およひ置候処、為三郎儀権太
夫ニ致面会、右鎗之穂事伝候儀ニ有之、且又安楽死失之年、聡与
不覚旨申之候、

一 安楽者別而信仰いたし手跡迄大切ニ乍残置、死失之年を不相覚段不
都合之旨御尋御座候処、

此儀答難出来、聡与者覚不申候旨申之候、
〔右安楽俱々取計候事情之年を聡と御答不申候段、何角与不審ニ御座
候様奉存候、〕

〔朱書〕
〔拾九之印〕

一 十二月九日附、野村淵蔵より梅田源次郎宛書面之内ニ而、菊池氏
一件之紙面承知仕、菊池氏よりも書状相廻り、此一条者一国之幸
ニ非ス、天下之大幸、志有ル人者何れも周旋を不可不致、去なか

ら事之為る事を主意トシテ為る時者、却而僥倖ニ相成、働スレハ時を防キ、道之害ニ相成候事も有之、此処ハ先生ニも態々御勘考菊生江も宜御鶴声、若僥倖ニ事を為シカケテ不成時ハ、却而始終之害ニ相成、依而此度之一件実ニ遠憂可恐事抔与品々認有之、又者譬言教諭感服之文言源次郎江教諭相願抔与も相認有之儀共、御尋御座候処、

此儀拾ヶ年程以前之儀ニ而、淵藏儀者福井藩中諸芸相心得居、内用風聞方ニ而江戸・水府等江遊歴いたし、先年為三郎兄之方江罷越、為三郎儀者宇和嶋ニ罷在候段承知いたし、此ものをも相慕ひ、淵藏上京いたし候処、此もの方ニ而為三郎ニ出會、同人之志願等申談淵藏同藩側用人鈴木主税儀ハ、越前守殿江格別(重栄) 近く罷出候ものニ付、淵藏江此もの為三郎共相頼、右同人より主税を以水府公御慎解方之次第申上貫、終ニ越前守殿御聞ニ入候様子ニ相聞候儀ニ而、右書面之次第者、其頃火急ニ取計候而者、却而可仕損哉之儀を為三郎江も可申解との心得を以、淵藏より差越候書面之旨申之候、

〔朱書〕
「式拾之印」

一 九月十五日附、十右衛門(鹿野) 齋齋宛之書面之内、昨日上置候兵書、京都江被遣候節、猶又此間御咄し申置候通被仰遣度与有之、其外鉄炮備之儀等有之候文面御尋御座候処、

此儀齋齋者若州藩中知人加納堅齋与申隠居之身分ニ而、重右衛門者同藩中ニ而大森重右衛門(十右衛門) と申甲州流兵学師範いたし居り、此もの父者謙信流師範ニ有之候間、此もの儀も聊相好候儀ニ而、他

流之儀ニ付齋齋相頼、重右衛門江外国戦之心得有之候哉尋貫候迄ニ而、右差越候返事ニ有之候旨申之候、

〔朱書〕
「式拾壹之印」

一 四月廿四日附ニ而、僧月性(友ヶ島) 梅田源次郎宛之書面、苦か嶋奉行松平某同席ニテ大儀論(議)ニ勝候様之文面御尋御座候処、

此儀昨年之事ニ而、此もの存付、月性江申教淡路・紀伊之間ニ苦か嶋与申所有之、右者大坂江之海門咽喉之地ニ候処、公儀者勿論紀州様ニも御物入続候付、西本願寺ハ鷺之森ハ旧地由緒有之掛ヶ所ニ付、右等之訳柄を以、当今之御時勢公儀之御加勢御国恩を存、苦か嶋台場御手伝可被申哉之儀月性江相咄し候処、感心いたし同人発口いたし候様ニ仕成、本願寺御門主江為申上候処、御尤ニ被思召御承引有之候付、月性紀州江罷下り御家老久野丹波守殿御用人小浦惣内、苦か嶋奉行等ニ対面論判いたし候処、丹波守殿被感、江戸家老水野土佐守殿者外港御掛りニ付、御同人江伺候上、公儀江御伺可相成由を申越候書面ニ有之候旨申之、其後御沙汰無之、月性儀ハ当四月相果候旨申之候、

〔朱書〕
「式拾貳之印」

一 八月廿一日附ニ而、行方(正言) 梅田源次郎宛之書面之内、松田某(重助、範義) 永鳥(三平、秀美) 等ハ別種ニ而、横井あとき見へす、横井学問近世一段之旨認有之候文言御尋御座候処、

此儀一昨年行方仙三郎儀、肥後横井平四郎方滞留中ニ差越、此もの方江松田を手よらす間敷旨之処、既右書面不着之内ニ松田罷越、果して此もの迷惑相成、永鳥三平与平四郎之学流等も違イ、平四

郎を賞美いたし候而申越候書面之旨申之候、

〔式拾三之印〕^{〔朱書〕}

一 嘉永二酉年五月、三御奉行江御渡書付并同年異船渡来二付阿部殿御^{〔正弘〕}達書写、其外当八月江戸表ニ罷在候異人風聞書等相記候壹綴并一枚物、右ハ何れハ手ニ入候哉御尋御座候処、

此儀壹枚物之儀者、当春江戸詰ニ罷在候赤根武人養父忠^{〔赤根雅平〕}右衛門より申来候風聞書ニ有之、其余者嘉永二酉年五月酒井若狭守殿先所

司代御勤役中、公用御調役相勤候、北条十郎太夫ハ此者従弟二付、同人ハ借請候書付ニ有之候旨申之候、

〔式拾四之印〕^{〔朱書〕}

一 五月廿日、重臣与有之候伊丹藏人ハ梅田源次郎宛書面之内ニ、拜聴之御高話意表ニ出で感伏仕候与有之、且江戸風説書を以策相認差越被下与之文言御尋御座候処、

此儀、当五月頃伊丹藏人ハ亜墨利伽応接之書を以、破か穩か之見込相尋候付、決而合戦ニ相成間敷与申置、此儀者宮様江申上候哉も難斗、然ル処同廿日前書々面を以外港之説差越、策可致呉旨申越候得共、其俣ニ差置、返事不致候儀ニ有之候旨申之候、

一 宮様江申上候哉も難斗与申立、殊藏人ハ書状ニ書類迄添差越候程之儀を、返答不致差置候儀者如何之事ニ候哉御尋御座候、

此儀当正月ニ宮様ハ御尋御座候節、子細茂有御座間敷与者存候得共、万一異人京都乱入之儀有之候与茂、天子之御為与存候得者不数成、私共迄一命可果心底ニ有之、併堂上之御身ニ而必御動被遊間敷、若御いらち遊し、内乱等起シ候様相成候而者恐入候儀ニ有

之、只鎮静ニ被為在候様申上候処、鎮静之二字御感心之旨御賞有之候得共、最早其後者藏人ハ被尋候共返事不致、面会之節品能取合置候段申之候、

〔式拾五之印〕^{〔朱書〕}

一 大高予左衛門ハ梅田源次郎宛之書面七通、何れ茂長文ニ而当今之御時勢且天地之變化等を認、中ニ者不容易事共多書綴り、或芝寺之尊前内々咄之趣杯をも相認有之候儀御尋御座候、

此儀最前ハ申立候通、兵学を好、其上至而筆まめ成者ニ而、不取留儀共認越候儀者此者ニ不限、親元并外ニ知ル人方等江も同様認遣シ候様子ニ有之候得共、虚説沢山有之、且芝寺之尊前与申候者何人之儀ニ候哉、心当り無之候処、信逸与申今度智恩院方丈ニ可被參僧ニ可有之哉与、知ル人申居候旨申之候、

一 書面之中ニ箱館之儀者此者ハ間度旨頼遣候文面ニ相見江、然ル上者、兼而右体風聞等早速申聞七候様、約諾有之候儀ニ可有之哉之旨御尋御座候、

〔式拾六之印〕^{〔朱書〕}

一 八月六日・八月十一日附ニ而、伊三郎ハ予左衛門宛之書面式通、何故所持罷在候哉御尋御座候処、

此儀伊三郎与申候者、御旗本之内兵学御師範蜂屋伊三郎殿ニ而、大高予左衛門之弟子内ニ有之、予左衛門儀江戸表ニ而夫是江立廻り製作手広之儀を相顕、全最前申立候通、松坂屋之借金断之為差越候書面之旨申之候、

〔式拾七之印〕^{〔朱書〕}

一 大高予左衛門ハ梅田源次郎宛之書面拾通、御尋御座候処、

此儀大高予左衛門ハ差越候書面前申立之通申之、いつれ茂反古ニ
いたし候而宜書面ニ候得共、前頭松坂屋借金返済不致断状ニ付、
此者茂加印いたし居候儀故、若公儀江被願候儀有之候哉茂難斗候
間、聊其節之証ニも可相成与存、残し置候旨申之候、

〔対印〕^{〔朱書〕}

一 封将微談 壹冊

右者前書々面之内ニ有之、源次郎江相贈候儀子細有之候哉御尋御座
候処、

此儀大高六八郎著述いたし候大備方之書を、猶又予左衛門補正い
たし、公儀江上書いたし候儀ニ而、此者江写差越候儀ニ有之、尤
此末ニ茂数文有之候由、承知いたし居候旨申之候、

〔式拾八之印〕^{〔朱書〕}

一 八月五日・同廿四日附ニ而、高滝左仲より予左衛門宛之書面式通之
内、海防備立壹冊御清写与申文言等杯茂有之、右書面何故所持罷在
候哉御尋ニ御座候、

此儀昨年予左衛門ハ差越、右左仲儀者阿部伊勢守殿家老ニ而、予
左衛門儀知ル人ニ有之、先年来阿部殿江此者罷出候様予左衛門よ
り度々申勸メ候儀も有之、且者手広ニいたし候儀故、前頭当座之
断之証迄与心得差越候儀ニ可有之、尤備立壹冊与申儀者予左衛門
著作いたし左仲江差遣候儀ニ可有之旨申之候、

〔式拾九之印〕^{〔朱書〕}

一 初夏十日附、大河原安楽より梅田源次郎宛書面之内ニ、先日之寄書

返進可仕処、権大夫拜見延援、其上拜面御相談仕度儀御座候、其記
者権大夫模写之儀相願度拜面ならずして及今日ハ、先忝上納仕御相
談可申処御他行、右御本ハ定而御借置之所、私江御見セ被下候事与
相心得付上り候儀ニ御座候得共、御模写之儀、尊兄御手を借、権太
夫願之向御吞込被下候而、手写可頼杯与品々相認有之候儀、御尋御
座候処、

此儀七八ケ年より以前安楽より之書面ニ有之候而、菊池為三郎所
持罷在候藤田盛之進著作いたし候常陸帶、水戸中納言様より御献
上明訓一班抄与、此もの附銘之保済秘録右三冊之書を安楽江為及
見、其後同人頼候ニ随ひ、此もの又ハ同人ニ申付写候上、詰り若
狭守殿江も入御覽候儀ニ而、前書者其節差越候書面之旨有之候段
申之候、

〔式拾之印〕^{〔朱書〕}

一 三宅高幸ハ梅田源次郎宛之書面三通之内、粟田様又ハ真光院殿等之
儀書込有之、其外異人之軍事等認有之候儀、御尋御座候処、

此儀高幸与申候ハ三宅定太郎之实名ニ而、同人義者備中連嶋之郷
士ニ有之、岩成主税助殿近習格相勤候儒者ニ而、此者名前聞付罷
越、一昨年三宅家祖備後三郎之像を粟田領ニ罷在候花房与申兵学
者ニ為写、此者作文致し遣候礼状ニ而、薩州殿ハフランス戦之儀
被仰上候儀を認、且真光院殿与申候者、御室御殿院家ニ而書之上
手ニ付、定太郎始此者儀も両三度罷出候儀有之、粟田御殿与有之
候儀者、定太郎兼而旅行を好候へ共、兎角金子を遣込候趣ニ而、

親類とも旅行不及致候付、容易旅行いたし度旨申之、段々相頼候
間、此もの親類江申談、栗田宮江筆道之御門人ニ可相成世話いた
し見候処、堂上方ニ而者差支候趣ニ付、先達而ハ長州産物世話人
ニ吹挙いたし遣候儀ニ有之候旨申之候、

右之通申立候様奉存候付承り書仕、猶又源次郎申口紛敷候廉等之儀ハ、
御沙汰之通朱書ニ相認申候、以上、

午十月三日

(注) (*) から (* *) の部分は、別本により改めた。

十月廿日 元小浜藩士梅田源次郎定明吟味申口

〔表紙ウハ書〕 梅田源次郎御吟味申口承書 一

〔雲浜、定明〕
午十月廿日、梅田源次郎所持雑物書類之内を以、御不審之廉御吟
味御座候付、源次郎申立承り書

覚

〔朱書〕

一 四月十八日附・四月十九日附之書状式通、梅田源次郎宛為三郎又者
重善与認有之候、右書面者全先年水戸前中納言様御事ニ付、為三郎

ハ源次郎方江品々周旋之手筋談越候儀ニ相聞候付、右訳柄其外文言
之内等を以夫々委細御尋御座候処、

源次郎申口

此儀拾ケ年程も以前之頃ニ而、重善与申者水府御家来菊池為三郎
之事ニ而、同人儀者当午四拾壹式歳ニ有之、書面到来之節者、同
人儀江戸表元同藩御暇相成候難波田弘藏与申者方ニ同居罷在候節
ニ而、右者水戸前中納言様御慎ハ被為免候得共、未夕御家政ニ御
携も無御座候儀を相歎キ、其頃橋本中将殿者伝奏ニ有之、御同人
御姉(妹)関東御上(勝子)蔭姉小路殿者御派利、且者水府女中ニ御続合も有之、
然ル処京北野辺ニ罷在候竹嶋与申老婆者、橋本殿江出入いたし候
続ニ而、前書姉小路殿御側江も罷出候者之由、知ル人城州川嶋村
山口董次郎(董次郎、義方)ハ承候付、此もの存付候二者、前中納言様御再出之儀
董次郎ハ竹嶋江申込、姉小路殿之可致手続与存、右董次郎を以相
頼賞候処、不容易儀ニ付猶委敷儀承度旨竹嶋申候趣董次郎申聞具、
則右手筋有之候次第等委敷為三郎江申遣候処、一旦ハ頼度旨申越
候得共、其後前中納言様ハ御再出之儀ニ付、列藩夫是可致周旋儀
不被成御好、内々有志沈静之御示有之候故、此者ハ竹嶋相頼候儀
共手引いたし呉候様申越候文意ニ有之、尤弘藏義者為三郎同志之
ものニ而、同人之使ニ一度此者方江罷越候得共、其後相果候旨申
之候、

一 文中ニ八幡之事与有之候者如何之儀ニ候哉、御尋御座候処、

此儀、城州八幡も姉小路殿江伝手有之候趣董次郎ハ承り候付、
是又申遣候儀ニ候得共相止メ候儀ニ而、尤八幡与ハ同所別当歎之

様ニ相心得居候得共、何分年月相立候儀ニ付、名前者不覚候旨申之候、

一 右之外手筋を拵、此ものゝ頼込候先々有之候哉、御尋御座候処、

此儀一二者酒井若狭守殿御事、阿部伊勢守殿(正弘)与御心易候由二而、

此もの儀者素々若州藩中之儀ニ付、此間も申立候通、同藩江戸詰

御家老渡辺権太夫、伯父大河原安楽等之手続も有之候段為三郎承

知いたし、元来宇和嶋より此もの大津表ニ罷在候段聞付罷越候儀

ニ有之候、全体為三郎宇和嶋江手寄候儀者、水戸様御統合ニ付、

前中納言様(伊達宗城)遠江守殿江実者御内沙汰ニ而も有之候哉、宇和嶋表

ニ逗留罷在、尤同所藩中此件ニ不拘もの二者、為三郎儀福井藩中

之由ニ申成、同人名前多田慎之助或ハ江戸表ハ文通等二者異次郎

杯与之替名を拵置候程之儀ニ而、既為三郎知ル人所藩中台所役

斎藤丈蔵与申もの儀者、前年京地修学之砌、同人相弟子当時同所

四条通東洞院西江入儒者(世六、遜齋)異太郎与申者儀者、此者兼而知ル人ニ有

之、右太郎之手引を以為三郎心願、若狭守殿入御聴度周旋之儀頼

を受候次第ニ有之、

二 二者此程申立候通、水戸様与越前殿与御統合之儀ニ付而者、既

横井平四郎(時存、小楠)且者野村淵蔵ハ差越候書面御尋之節申立候通、前同藩

ニ此者ハ之手続有之、前同人初メ吉田悌蔵(東篁)・坂部勘介(準介)・岡田順助

杯之ものハ其筋同藩鈴木主税等江為申込候積ニ有之、

三 二者石州濱田家中馬廻り格山田金之助与申者、其頃此者方ニ寄

宿罷在、松平右近将監殿与者水戸様御親子之御間柄ニ付、讒臣之

ため水老君一旦御慎ニも相成候程之儀を其俣ニ難置旨を申、右金

之助其後為三郎同道江戸表江も罷越候程之格別骨折もいたし罷在候儀ニ有之、

四 二者前頭董次郎任申、八幡ハ姉小路殿江周旋之一条ニ有之、

五 二者右董次郎ハ竹嶋を以橋本殿江周旋之儀ニ有之、

右之外、水戸様御儀ニ付手筋を求メ深周旋いたし候儀無御座旨申

之候、

一 右書面之内、下ケ札与申儀者如何之訳ニ候哉、御尋御座候処、

此儀奥ニ御座候「拾五印」(朱書)之書付ニ有之、此者ハ八幡又者橋本殿

江周旋之儀委細為三郎江申遣候処、右書面江下ケ札いたし、董次

郎を以先方江宜断申成之儀、且挨拶等を申越候儀ニ有之、尤本文

ハ紛失いたし候哉与存候旨申之候、

〔式〕(朱書)

一 六月廿九日附之書状志通、梅田源次郎宛菊池重善与認有之候、右書

面者全前同断先年水府老君御一件御恢復之御色合承り候旨、且浦賀

入津之英吉利船海岸乱妨之儀朝廷江不被奉奏儀、伝奏衆ハ所司代江

御札問、中山殿御取扱之風聞承度旨申越候様相聞候付、夫々訳柄委

細御尋御座候処、

此儀大体初ケ条書面到来之頃ニ而、為三郎儀ハ宇和嶋表ニ罷在、

駒込水府御屋敷江三連枝方被召候処、高松殿ハ全水老君与御中違

ハニ相成有之候付御出無之、又候御召有之候趣、左候ハ、高松殿

与御和睦可相成哉、然ル上者追々水老君御一件程能相成可申与之

儀迄を申越候儀ニ有之、右之序ニ異国船之風聞申越候儀ニ而、所

司代江御札問之儀ハ其頃宇和嶋ニ而風聞之儀尋越候得共、全虚説

二 御座候旨申之候、

一 右為三郎与者格別打解、不容易内談いたし居候身分之處、此程以来
同人当時之住所且者文通もいたし居可申哉、度々御尋御座候得共不
致文通、当時之住所をも耽与不相心得候段申立居候付、猶又不都合
之段御尋御座候處、

此儀先年若狹守殿御歸府、所司代被為免候後、引統此者儀も御暇
出候付、最早此者江用事無之由、為三郎儀一旦恩儀を乍請居、事
成就いたし候ハ、疎遠いたし、文通をも不致、耽与恩儀忘却いた
し居、其後此者先年始而異船浦賀江渡来之節、江戸表江罷越、為
三郎相尋候處、一向仕向不宜候付申争、夫音信不通之旨申之候、
一 為三郎儀、大恩乍請居、恩儀忘却いたし候儀与ハ如何之訳哉、御尋
御座候處、

此儀水老君御一件心勞いたし、事成就いたし候付、心弛ミ老耄同
様ニ相成居候旨、福井藩中之ものハ此者江相咄、全病氣ニ而も可
有之哉之旨申之候、

一 病氣之儀ニ有之候ハ、仮令為三郎分文通無之共可捨置答ニ者無之、
親族等江之通路ニ而も可有之答ニ相聞、儒者ニ不似合之答方ニ有之
間敷哉之旨御尋御座候處、

此儀病氣与者承り候得共、最早一旦之恩儀忘却いたし候もの江此
者可致文通筋無御座旨申之候、

〔三二〕
(朱書)

一 六月朔日、阿部伊勢守殿水府老君江御内諭書之写、此者如何体之先
ニ而承り書取候儀哉、尤紙品等も如何敷、定而他出之上其所ニ而相

認候儀哉与相見候段、委細御尋御座候處、

此儀水老君御事、追々被為解候御運ニ相成、將軍様水戸様江被為
遊御成候頃之事ニ而、為三郎分此者方江吹聴旁申越候付、此もの
手元ニ而写置、則前条渡辺権太夫江も申遣候写ニ御座候而、既保
濟秘録江も書留置候旨申之候、

〔一〕
(朱書) 四五之印之分者、九之印ニ相添候書面ニ付、此所江者認不申候、

〔二六〕
(朱書)

一 六月朔日附之書状彙通、雲浜宛重善与認有之候、右書面者全前同断
之事件ニ付、為三郎儀夫是立廻り居候中与相聞、文言之内老寡君江
も時宜ニ寄相伺候而、一良策者施し度杯与相認御座候儀、夫々訳柄
委細御尋御座候處、

此儀雲浜者此もの之号ニ有之、前書水老君御一件中之頃ニ候而も、
為三郎宇和嶋表ニ罷在候節之儀ニ有之、前条山田金之助早々出府
いたし呉候ハ、為三郎儀も出府いたし、時宜ニ寄水老君江相伺、
濱田殿江申込之良策いたし度与申儀ニ有之、尤其砌水老君未夕真
ニ御広く不被為成、此上周旋いたし候ハ、西山先君之御余沢を以
御疑も晴候儀与申候迄ニ而、外ニ子細者無御座候旨申之候、

一 文中ニ齋丈与有之候ハ、齋藤丈藏之事ニ候哉御尋御座候處、

此儀齋藤丈藏之儀ニ御座候旨申之候、

一 為三郎儀、宇和嶋表ニ何ヶ年以前分何程罷在候哉御尋御座候處、
此儀為三郎儀、宇和嶋江罷越三ヶ年程相立候上、此者知ル人ニ相
成、其後五ヶ年程之内度々此者方江罷越、江戸表又者宇和嶋等江
度々罷越居、其内遠江守殿分内御沙汰ニ付、壹ヶ年斗同所ニ而足

(伊達宗城)

止メ罷成候儀ニも有之候由承り候儀御座候段申之候、

〔七〕
(朱書)

一 五月廿日附之書状尅通、梅田宛きくち与認有之候書面之内、待人着候得者香氣深密相訳り候与申儀、是又前同断之事件ニ相聞候付、夫々訳柄委細御尋御座候処、

此儀前同頃為三郎儀、宇和嶋表之差越候書面ニ而、同所藩中江戸表ニ罷在候ものニも為三郎同志のものも有之、江戸之罷越候を相待様子承り度存候迄ニ而、尤此書面ハ添書ニ有之、外ニ本文御座候旨申之候、

〔八〕
(朱書)

一 二月十日附之書状尅通、梅田源次郎宛為三郎与認有之候書面之内、入湯出途良策周旋杯与有之候儀、是又前同断之事件ニ相聞候付、夫々訳柄委細御尋御座候処、

此儀、為三郎宇和嶋表ニ罷在候節差越候書面ニ而、同人儀水老君御一件ニ付周旋之儀、前条之通宇和嶋表ニ而足止メ罷成候後機会至り、遠江守殿江表向ハ湯治与託し他出之願大体相叶可申候哉ニ付、出京いたし、猶又夫々江心配いたし呉候様可相頼与之儀迄ニ而、其節今前条金之助江相掛り、濱田殿江申込之周旋罷在候儀ニ御座候旨申之候、

〔九〕
(朱書)

一 六月廿日附之書状尅通、雲浜宛為三郎与認有之候、右書面ハ全前同断、先年水府老君之御一件ニ付而、為三郎出発之儀待人有之、山田金之助出府為及延引、断之趣等品々申越候儀ニ相聞候付、右訳柄其

外文言之内等を以、夫々委細御尋御座候処、

〔七之印〕
(朱書)

此儀「七之印」同頃、為三郎宇和嶋表ニ罷在候節之儀ニ有之、金之助与約束いたし候得共、江戸表江出発之儀時合不至、遅々相成候儀、且者此者前条董次郎を以、八幡之筋被用候様いたし置可呉様与之儀申越候儀ニ有之、尤江戸表ニ而ハ水府之讒臣奸者之もの共手堅いたし居候付、為三郎同志のものニも内外十分ニ手配いたし度杯与申越候迄ニ而、其余ニ子細者無御座旨申之候、

一 文中ニ石清水与有之候儀者、八幡之儀を申越候儀ニ可有之哉、御尋御座候処、

此儀八幡之儀を申越候旨申之候、

一 右同断、山嶋与有之候儀者何れ之ものニ候哉、御尋御座候処、

一 此儀山口与之書損ニ御座候哉与相心得候旨申之候、

一 右同断、巽周旋石清水良策与有之候儀者、巽太郎ニも手筋有之候而申越候儀ニ可有之哉、御尋御座候処、

一 此儀巽太郎ニ者手筋無御座、全山口董次郎而已ニ御座候旨申之候、

一 右同断、監察江相下り水ノ寒物調出し与有之候儀者、御目付衆江水府之奸者御取調被仰出候儀杯与可申儀ニ有之候哉、御尋御座候処、

此儀御吟味之通申越候儀与相心得居、尤水府之奸者御取調御座候ハ、又々いつれ之筋江申込悪事を防(働)キ可申哉難斗与存、則前書

ニ申立候通、為三郎之内外十分手配いたし度旨申越候儀ニ御座候旨申之候、

一 右同断、四月十五日、於當中我当公与越前(松平慶水、春嶽)候与謁見等之儀杯認有之候内、我当公又者当公与有之候儀者、何れを指而申越候儀与相心得

居候儀哉、御尋御座候処、

此儀我当公与申儀者水戸様、当公与申儀者遠江守殿之御事二候与相心得、右方々御謁見有之趣為三郎承り、全水老君御恢復可相成儀、御談論之事ニも可有之哉与存候而申越候儀ニ御座候旨申之候、
一 右同断、右時勢ハ来書之内切抜差越、尤秘ナルヲ杯与有之、右者何等之儀申越何れ之書面ニ候哉、所持いたし候ハ、申立候様御尋御座候処、

〔宋書〕 此儀所持之書面類之内ニ有之候旨申之候、

〔宋書〕 「右者則四五印三通之内ニ御座候、」

〔四〕

一 名前不分端書老通、右書面之内水寒之調相下り候与有之、前同様水府之奸者を御役人方ニ而御調有之候段申来候儀与相聞候付、文意夫々委細御尋御座候処、

此儀御吟味之通、為三郎江到来之書状文中切抜差越候儀ニ而、委細者前条ニ御座候水府讒臣奸者之者共、公儀ニ而御調之風説申来候儀を、此もの等夫々周旋之心得迄ニ申越候儀ニ御座候旨申之候、

〔宋書〕
〔五〕

一 三月八日附書状老通、名前切取難相分候、右書面前同様水府老君之御次第御内実被為解候得共、未夕御登城等も無之杯与江戸表之品々風説、又ハ水府老君御子様方を尊信いたし候文意ニ相聞候付、水府列藩何レ之者ハ為三郎江到来之様存居候哉、夫々委細御尋御座候処、
〔宋書〕 此儀、前「九之印」之書状与一緒ニ到来いたし候様相覚、全為三郎同志江戸表同藩下輩之もの与者存候得共、名前者不相心得候も

のニ而、水老君御恢復之色合其外為相知候儀を、為三郎ハ此者方江申越候迄ニ御座候旨申之候、

一 文中ニ宮崎与有之候者何レ之者ニ候哉、御尋御座候処、
〔白〕 此儀元薩州藩中ニ而水府江被抱、其後猶又諸家家来ニ立廻り候宮崎定太郎与申ものニ而、此者儀一度面会いたし候儀ニ御座候旨申之候、

一 素々名前無之書状ニ付、文中ニ北方御兄与有之候ハ何れ之者ニ候哉御尋御座候処、

〔宋書〕 此儀水府表ニ罷在候為三郎之兄之儀ニ而、江戸表ハ指而北方与儀ニ御座候哉之旨申之候、

〔宋書〕
〔五之内〕

一 外ニ名前不分端書老通、是又前同様水府一件之儀与相聞候付、夫々委細御尋御座候処、

此儀前同様一件ニ付、為三郎到来之書状切抜、此者方江差越候儀ニ有之、全御目付方ハ御徒目付安藤伝蔵之説、伊勢守殿江被仰上候由ニ付、公儀之御英断祈候与申候儀申越候迄ニ而、外ニ子細者無御座候旨申之候、

一 右三通之書面、為三郎方江差越候もの之名前相心得候哉、手跡其外共押而御尋御座候処、

此儀一向不相心得、何分前書ニ申上候通水府列藩之もの与者相心得候得共、為三郎ハ一切名前不承、尤三通共同手跡与相心得居候旨申之候、

〔宋書〕
〔拾一〕

一 極月八日附之書状壹通、雲浜梅田宛重善与認有之候、右書面者全前同断之事件二付、外邪之妨を心配いたし、水府老君御恢復可相成様、同志手筋を可求与之周旋談越候儀ニ相聞候付、右訳柄其外文言之内逸々委細御尋御座候処、

一 此儀拾壹ヶ年程も以前之儀ニ而、前条ニ申立候為三郎儀、濱田藩中山田金之助同道、江戸表江罷下り、為三郎儀者同所ニ相残り金之助者帰国いたし候節、江戸表分差越候書面ニ而、全水老君御恢復可相成様同志之者共手筋周旋いたし、既金之助分手筋を以濱田殿江為申込候処、濱田殿者御若年之御儀、其上余り御近親ニ付、御同家分者難被成御取持旨申之、老臣共取敢不申、右者内実結城^(朝道)之族分品能申込有之候故ニ可有之哉ニ相聞候付、邪曲を見拔候杯与申越候儀迄ニ御座候旨申之候、

一 文中ニ、此機速ニ英断可在様、援助偏ニ頼候与有之候者何等之儀ニ有之候哉、御尋御座候処、

一 此儀、前条ニ御座候山口董次郎竹嶋方江之手続、同人之儀等援助を可頼与之儀を申越候儀ニ御座候旨申之候、

一 右同断、姉婦人与有之候儀者何レを指而申越候儀ニ可有之候哉、御尋御座候処、

一 此儀先条ニ申上候通、関東御上臈姉小路殿を指而申越候儀ニ御座候旨申之候、

一 右同断、姉小路殿之御縁続之者共之名前其外等有之候儀者、初ヶ条并前書ニ有之候董次郎等之手続を以、水府老君御一件姉小路殿江申込候事談之答ニ候哉、御尋御座候処、

一 此儀全以前ニ申立候通、水老君御恢復之儀、董次郎を以八幡并竹嶋等之続を姉小路殿江可申込儀、八幡之方者相断、竹嶋之方容易候間、国許老練共江密談いたし申度旨申之候書答差越候儀ニ御座候旨申之候、

一 文中ニ山口董次郎舅家之養子某者、橋本殿之雜掌之次男之由ニ付、右雜掌某分申込、姉小路殿之御腹竹嶋与申候老婆者至而容易く候旨、委敷此者分申遣候儀ニ相聞、右雜掌名前をも承知いたし居可申哉御尋御座候処、

一 此儀右雜掌之名前者相覚不申候得共、董次郎舅家之養子者、橋本殿之雜掌之者分罷越候義三郎与申ものニ御座候旨申之候、

一 右同断、林某与有之候儀者林伊太郎殿^(鶴梁)之儀ニ可有之哉、御尋御座候処、

一 此儀新御番林伊太郎殿之事ニ候而、為三郎儀者兼而知ル人ニ御座候与存候旨申之候、

一 右同断、姉小路殿方江、老婆竹嶋并同人倅官方之侍大塚兵庫与申候者同道ニ而、前年迄滞府罷在、右兵庫ハ姉小路殿与者御異父兄弟ニ有之、尤御同人被愛、同人江戸表ニ而林伊太郎殿之門人ニ相成候付、御同人分兵庫出府可申勸処、折節同人儀出府いたし居、同人分姉小路殿江申込候者手重ニ而、竹嶋儀者前御同人江者近ク罷出候儀等品々相認、又者内々兵庫分承り候二者、竹嶋儀者橋本殿之御腹ニ而、姉小路殿与者御異母兄弟、兵庫者前御同人之御異父弟ニ而、竹嶋者大切ニ有之、此人悪敷与思候而者兵庫母子之ためニも不宜杯与是又相認有之、然ル処初ヶ条ニ、此もの竹嶋儀者橋本殿之出入方之旨手

軽ク申立置、前書々面之文言二者、竹嶋之儀此者申遣方与為三郎承合与行違有之候与者乍申、既ニ訳社違候得共、竹嶋儀者姉小路殿之御腹与存、為三郎江申遣置候程之竹嶋身分を、畢竟出入之老婆杯与事实を手軽ニ申包候儀者外ニ子細も可有之哉与、押而御尋御座候処、

此儀表向御出入ニ相成居候旨承り居候付、其段申上候儀ニ而、委細可申上儀者失念仕居候旨申之候、

一 仮令表向ニ候共、此一条ニ付而者此者深手筋を求メ遣居、夫是江可申込心底ニ有之、増而當中江之手筋ニ付旁可申立筈之処、失念いたし候杯与申儀不都合之旨、猶又御尋御座候処、

此儀恐入候旨申之候、尤前条此者姉小路殿江之手続申遣候折柄、為三郎方ニ而も手筋を求候機會打合、水府老練江申談、兵庫江申聞、竹嶋之出府を頼、品能可申込積ニ而、此者方江委細申之差越候書状ニ御座候旨申之候、

一 前書文中ニ大塚兵庫与有之候者、何レ之家来ニ相成居候ものニ候哉、御尋御座候処、

此儀為三郎申越候儀ニ而、何レ之者ニ候哉不存候旨申之候、
一 先達而以来、堂上方江者^(尊融入道親王)青蓮院宮^(維長)又者堤殿等之外不立入旨申之候得共、既前頭水府老君御一件ニ付、夫是手筋も可有之候様相聞、殊ニ永々京住罷在、当時ニ而者前頭之雜掌且大塚兵庫之居所等も不存杯与者難為申立候様相聞敷哉之段、御尋御座候処、
此儀橋本殿雜掌之手筋者、何分前書之通董次郎申聞候迄ニ而、年数相立、当時相覚不申、其余先日以来申立候外、宮堂上方家来

等取留相覚候名前も無御座、兵庫之居所をも堅不存旨申之候、

一 文中ニ越藩(平慶永、春藤)閣老江申込、又者為三郎発途之儀等認有之候儀者、越前殿(松)御老中方江手を入可申儀ニ相聞、為三郎儀者水府江出発与申儀ニ可有之哉、且又前条返書者何与申遣候儀哉、夫々御尋御座候処、

此儀越前殿御老中方江申込之儀者、取分手早キ御筋之儀与存申越候儀ニ御座候而、為三郎儀者水府近辺江出途いたし候儀故、水府老藩^(君)江前書之手筋可談込与之心底申越候得共、初ケ条ニ申立候通、終ニ此儀者事遂不申、且別段返書与申而不差遣候旨申之候、

^(朱書)「此儀一体之処、初ケ条与可被遊御見競候、尤一段会得難仕候廉々も御座候付、今一応源次郎申口御吟味御座候方可然御儀与奉存候、」
〔拾壹〕

一 正月十六日附之書状壹通、梅田源次郎宛菊地為三郎与認有之候、右書面本文者悔之文言ニ而、端書者前同断全水府御一件ニ付、蟄居慎之面々数十人宥免杯与有之、右訳柄其外来状之頃合等をも夫々委細御尋御座候処、

此儀拾貳ヶ年以前四月頃、此もの大津表ニ罷在候節、初而為三郎宇和嶋表(松)罷越、凡三十日斗も此者方ニ罷在、同七月頃此もの儀京都江引越、麩屋町綾小路下ル町ニ而借宅罷在、為三郎儀京都ニ而者宿屋ニ逗留いたし、猶又同人宇和嶋江罷越、翌申年同所(義比)差越候書面ニ有之、尤其後五ヶ年程同人与文通いたし居候旨申之、且文中ニ尊大人与有之悔文言之儀者、此者父矢部岩十郎儀先年永御暇相成候後、同人母者当御家中平野数馬方(義比)罷越候由緒を以、

平野重助与相名乗、京都二夫是住居罷在候内、此者今相養同居もいたし罷在、其後若州江立入候儀御免相成候付、同所江引越、前書拾貳ヶ年以前十一月同所二而相果候付、翌正月右体悔申越候儀二有之候旨申之候、且又旧冬霜月念九日、甲辰以来蟄居慎罷在候面々數十人有免相成与有之候儀者、水府御一件二付結城刁寿奸計二而列藩藤田誠之進・戸田忠太夫・或藍沢孝藏之類、數十人蟄居慎等二罷成居候処、此節御有免相成候儀を、此もの江為安心為知越候迄二御座候旨申之候、

一 文中二富永昌次郎与有之候者、何レ之もの二候哉、御尋御座候処、此儀富永昌次郎与申者、其頃遠州浜松二而為三郎与近付二相成候三州吉田扶持人之由二而、鉄炮製造修行二立廻り居、折々為三郎二付添罷在候者二御座候旨申之候、

一 右同断、三寺二相談与有之候儀者如何之訳哉御尋御座候処、此儀越前殿藩中三寺三作与申もの二而、水府御一件俱々骨折罷在候もの二有之候処、前書數十人恢復二者相成候得共、今一段發達之模様相見不申候付、様子二寄江戸表江可罷越積二右三作江相談いたし度候処、同人儀宇和嶋江不致着候付、此者江右發達可相成廉工夫可相頼旨申来候迄二而、其余二子細者無御座候旨申之候、

〔朱書拾貳〕

一 二月朔日附之書状壹通、梅田宛菊地重善与認有之候、右書面是又前同断全水府老君之御一件、且者水府両君御離間之儀二付、佞者或奸者を憂候而、為三郎分此者江前同様品々周旋之手筋等申談越候儀二相聞、且者外寇海防之比判入交り候長文二付、右訳柄其外文言之内

等、逸々委細御尋御座候処、

此儀前条同年、宇和嶋表分差越候書面二有之、詰り前条二同様、水老君御恢復可相成候様、此者共江夫是周旋之儀頼越候儀二御座候旨申之候、

一 文中二侗庵策論呈度与有之、右者如何之訳哉御尋御座候処、此儀古賀小太郎殿之著述海防億側之書二有之、追而書拔端冊二いたし差越、羽倉外記殿江川太郎左衛門殿等之海防策之上書写者、此者方江終二差越不申候旨申之候、

一 右同断、御英断云々愈御発二茂相成候趣御所置如何被仰出候哉、来諭宋岳飛文臣武臣云々之説、且者方今訓練未論之儀等、此者分夫々申遣候故之答二相聞江、右訳柄御尋御座候処、

此儀御英断与申者、水野越前守殿御老中御勤之頃二而、専ラ異船御打払之御所置被仰出候旨風聞有之、右御沙汰を賞し御英断与申候儀二有之、全体諸家方之訓練不成真実候様存候付、則宋之岳飛之説等をも挙ケ、諸士之柔弱を評し、此者海防之議論等を認遣候処、為三郎分右返書二、其根を堅して加ルニ御節制之被為在、訓練度杯与申越、其頃世上品々外寇之沙汰いたし候付、諸藩之者者銘々存意を認、互ニ書通之文言ニ加江候事共多く、畢竟此者儀も存意論判いたし相認候迄二御座候旨申之候、

一 右同断、爾今余姦者強、濱田藩二因候一計策天之賜杯与有之儀者余事二候哉、又者前条山田金之助を手筋二いたし候故を申候事二可有之哉、御尋御座候処、

此儀全水府御一件奸者之事二有之、濱田者金之助之事二而、同人

之手筋相悦申越候迄二御座候旨申之候、

一 右同断、姦策其以来之所為与申者、諸事遲滞させ、外援も格別之所者見江不申候得共、彼等カ所為根底難測、心配仕候与有之、又者密謀之内第一等之策スル処、諸事遅々致させ、内二者種々の讒間を廻し、御父子隔絶相成候様二与、佞言諂諛を以後宮二因り、或左右二含ませ種々姦謀を施候様子、恐れ候処者後宮二深因ミを求る所也、婦女子佞言入易く姦智を廻シ離間候迎、隔絶所二者無之、父々タリ子々タリ、至極御親睦毛髪を入るへからず与者存候得共、当公未タ若年二有之、上下之有司忠臣志士者悉遠ケられ、只奸曲之内二被囿、奸説之言上不被致信用与者分明候得共、寸善尺魔之害も難計与嘆息之文言、并下ケ札二、

〔右下ケ札書拔〕

外援御側衆本郷丹州也、是者当時之深奸内藤ナルモノ至極之

懇意ナリ、此外二戸川播州ト云モノアリ、何役二候哉、是等

カ力ヲ尽候様子ニ相見江、内々者助勢不少、江戸御屋敷内ニ

而、御役家等密々夫等之処探索得テタル御方有之間敷哉、以

前伺置秘々密々与有之候、

右相認候次第者、全前条之一件二候哉与相見候得共、後宮外援其外

姦謀之訳柄等、猶又押而御尋御座候処、

此儀全水戸様御事二而、素々御父子御親睦を、讒奸之もの相妨可

申哉を深憂候儀二而、何分奸計之もの共追々手を尽、後宮女中方

又者御役人方之内、本郷丹後守殿者水藩内藤東一郎与至而別懇之

上、戸川播磨守殿者東一郎妻之里方之趣、右等結城刁寿之奸謀ニ

被靡、同人夫是手筋を求、類ニ當中江品能申込候様子ニ付、其頃

若狭守殿御所司代御勤役之御儀ニ付、此もの手続(酒井忠義)安楽并渡辺権太

夫入御聴、江戸御屋敷ニ而當中江申込候荷擔之もの共御探索方

願度心底ニ而、為三郎入頼越、則此もの今前書兩人江来状為相見

候得共、迎も難成筋ニ付、其俣ニ相成候儀ニ御座候旨申之候、

一 右同断、老寡君直書之写相認、入内覽候杯与有之候儀、夫々御尋御

座候処、

此儀水老君今當中納言様江御諭示之御直書写ニ有之、全水老君御

心得違ニ而、御答被為請候儀御後悔、向後御過被為改、公儀江御

忠儀御尽し被成度、付而者當中納言様御若年之御儀ニ付、此末御

心得違無之様与之御文言ニ候与相心得、且又御家中一統江も御書

を以有志之者共御恩を思ひ、夫是手筋を求周旋いたし候儀、却而

御為ニ不相成与之是又厚御示ニ而、実ニ其節深被為在御慎候旨承

り居候付、定而當時も御同様深被遊御慎候与存候旨申之、右両通

之写者渡辺権太夫江差遣し、当時此者不致所持候儀ニ御座候旨

申之候、

一 右同断、三寺三作当春再遊、僕上京之上是も落合可申与有之候儀者、

前同伴之儀ニ候哉、夫々御尋御座候処、

此儀前条ニ申立候通、三寺三作之事ニ而、同人九州遊歴之後宇和

嶋江可罷越処帰府申来候儀ニ而、素々為三郎儀者兎角羅立周旋い

たし度心底之処、遠江守殿今御引止之由ニ而、尤宇和嶋ニ而者家

老吉見左膳茂内御沙汰を請居、外二両三人茂同志之者有之、且右

三作儀者其後不致再遊候儀ニ御座候旨申之候、

〔右外寇一条海防之説与水府老君御一件之儀与入交候儀者、其時勢二寄、一事両端相成候哉与奉存候得共、都而源次郎無由廉而已委敷御答申上、今般御吟味之御手掛りニも可相成与奉存候程之文通柄者、品能切払候様相聞江、又者不存体ニも申上候、何分此文通者為三郎周旋之眼目ニ候得共、源次郎ニ取候而者、強而御糸口ニも可相成与者難被存候得共、疑候得者右為三郎与品々引合之廉ニ而、再応御吟味之上、申口之様体被遊御聞取候方ニも可有御座哉与奉存候、〕

〔朱書拾三〕

一 十月廿八日附之書状彙通、梅田宛為三郎与認有之候、右書面是又前同断水府老君御一件之色合、且浦賀入津之異船江川太郎左衛門殿御乗込之風説等を文中ニ入交り候儀ニ付、右訳柄委細御尋御座候処、

此儀拾式ヶ年以前、宇和嶋表之來状ニ而、小石川御館江將軍様（徳川家慶）被為遊御成、水老君御初メ御庶子方江被為遊御対顔候故、最早奸謀邪智ニ候共、離間讒説自ラ施候事ニも相成間敷、追々水藩有志

之輩も恢復之勢与相悦申越候儀ニ有之、且初而英吉利浦賀表江参り候節、下田ニおいて江川太郎左衛門殿勇壯之風聞書此者之為三郎江差遣候儀ニ而、右太郎左衛門殿ハ水戸様江被成御出入、宇和嶋殿江も御同様御因縁有之候旁申遣候処、同所ニ而者太郎左衛門殿（廳趣）億病之風聞有之候付、右源次郎之風聞ニ而、為三郎安心之旨

申越候儀ニ有之、且又英吉利初而渡來ニ付、公儀ハ朝廷江御奏問（聞）有之候付、石清水江御祈祷有之候風聞、若狭守殿御家來之承り、其儀も申遣候返書ニ而、其頃百姓共ニ迄身分相応御厚恩を可報与之御達も有之候付、外寇之噂專いたし居候折柄故、夫是海防策

論議いたし、則其節水野越前守殿藩中塩谷幸藏著述籌海私議之策（甲藏、世弘、右陰）論之書手ニ入候儀ニ御座候而、其余ニ子細者無御座候旨申之候、

〔朱書拾四〕

一 八月十四日附之書状彙通、梅田宛重善与認有之候、右書面是又前同断、水府御一件与外寇之説入交り候儀一事両端ニ相聞候儀ニ付、文言之内を以て夫々委細御尋御座候処、

此儀前同年歟之様相覚、前条斎藤丈蔵之弟同人同藩大野昌三郎与申者、蘭学修行ニ罷出候節、為三郎之此者方江之伝書ニ而、其頃諸国蒼生ニ至迄、海防存寄之次第、聖堂ニ而御建議相成候旨御沙汰有之候折柄故、兎角海防之論議を申、尤水府一件ニ入交り一事両端相成候儀者、則保濟秘録江も挙置候通、水老君之御事、素々為三郎儀丈蔵之傳手を以此者方江引合候趣意者、外寇海上乱妨之時世ニ、文武両道御研窮之水老君無実之罪ニ被為沈候儀、残念至極之御儀ニ付、天下のため与存、為三郎之筋周旋被相頼候故、夫等を以自然与外寇海防之論議をも、為三郎与互ニ往答罷在候儀ニ御座候旨申之候、

〔朱書拾五〕 拾五印者初ヶ条之奥ニ相認候儀ニ御座候、

〔朱書拾六〕

一 十二月三日附之書状彙通、梅田宛菊池重善与認有之候、右書面全海防策論御英断相折、何卒当然之被為在御所置、神武堂々与押張、渡來ならざる様いたし度与之文言、又者前同様之事件奸氣難退坏与有之候儀、全体此者之論議為三郎与同意候哉ニ相聞、然ル上者其頃以來外夷御打払之著作をもいたし候事哉、夫々委細御尋御座候処、

此儀前条ニ申立候通、夫是策論手ニ入、尤文中ニ有之候羽倉外記殿之策論者未夕手ニ入不申候得共、其頃此者存候ニ者、速ニ外夷御打払之御所置御当然与存居、乍併當時ニ至候而者段々外寇御心接重り候付、今更御打払相成候而者御違約ニ相当り可申候哉与存候付、御打払不宜候様存候旨申之、尤其頃前頭渡辺権太夫を以若狭守殿江も海防之儀、詰り内を整、御打払之建議いたし差上置候儀ニ有之、且又水府之奸者難退儀者、先条ニ申立候儀ニ御座候旨申之候、

〔拾七〕

一 三月十八日附之書状壹通、梅田宛為三郎与認有之候、右書面是又右同断之事件追々都合相成候得共、奸氣難退且者海防之儀不遠内御英断被仰出候御模様之由、安心いたし候杯与有之候儀、委細御尋御座候処、

〔拾八〕

一 此儀前条同頃宇和嶋表分差越候書面ニ有之、委細前同様之事柄ニ而、御打払之御模様風聞いたし候付、申越候迄ニ御座候旨申之候、
一 六月日附、名前不分口上書壹通、右書面全水府老君之御一件ニ付而、為三郎周旋出途之願書写与相見、右者同人分何れ江差出可申書面ニ而何れ分到来いたし候儀ニ有之候哉、右訳柄其外夫々委細御尋御座候処、

此儀拾壹ヶ年程も以前、為三郎宇和嶋表ニ逗留罷在候節、如何いたし候而成共水藩讒奸之者を退ケ、水老君御恢復可相成候様周旋いたし度存候折柄、前頭山田金之助儀、此者方ニ而濱田殿江申込

之ため周旋、為三郎同道可致出府旨申談候折柄、同人儀者宇和嶋殿御引留故、家老吉見左膳同列之者江右金之助儀、水老君之御次第竊ニ致歎息、同志周旋可致旨を表賞いたし、又者此者夫是手筋を求候儀品能書頭、為三郎分右左膳同列之者江差出候願書写ニ有之、右者為三郎手跡ニ御座候旨申之候、

一 文中ニ、石清水別当某之内ニ惣取締役相勤候某与申者、此者高弟巽太郎之旧知ニ而、右別当某ハ前頭姉小路殿之御舎弟ニ候杯与有之、最前御尋之節、巽太郎者此もの弟子ニ而無之、知ル人之旨申立、且又初ヶ条前同様八幡之別当者姉小路殿江伝手有之候趣、董次郎分承り候与申立、既御舎弟与相分り候程之事柄を只々容易ク申成、都而夫是申立方不分明ニ相聞、右者素々別当之名字をも心得居可申哉、又者夫々董次郎ニ託シ、内実者此者直之手筋ニ可有之哉与、押而御尋御座候処、

此儀全八幡之一条者実ニ董次郎分承り、同人伝手ニ相違無御座、此者直之手筋ニ者決而無之、併別当某者姉小路殿之御舎弟之儀、董次郎分伝承いたし候得共、最前御吟味御座候節、只々容易ク申立候段、恐入候旨申之、且又前書巽太郎ハ此者弟子ニ者更ニ無之、畢竟百姓之山口董次郎手続ニ而者願書手輕ニ相聞江可申哉、旁最初巽太郎分此者江手引いたし候一件ニ付、此者高弟与申莊、八幡者右体太郎之周旋ニ仕成候ハ、遠江守殿江之御聞江も可宜哉与、彼方ニ而為三郎分其筋江申談、少茂早く入湯之願聞濟ニ相成候様存候而、取拵候儀ニ可有御座候旨申之候、
一 手筋を求周旋いたし候先々ニ而、此者名前相頭候分御尋御座候処、

此儀若州且宇和嶋者申迄も無之、此者名前出候儀ニ御座候得共、
 其余者不分明ニ存候旨申之候、

〔一〕^{〔朱書〕}

右源次郎申口之内、山口董次郎儀者百姓之事故、宇和嶋殿江名前
 出候儀手輕ニ相聞候旨申之候廉、一理尤之様ニ者相聞候得共、董
 次郎者橋本殿雜掌ニ親類御座候者ニ而、殊ニ源次郎儀者毎々董次
 郎苗字を申聞候ニ付、普通之百姓ニ而も有之間敷哉、右者為三郎
 取捨候与者乍申、右体名前を難出与申候上者、旁前書押而御吟味
 御座候通、却而源次郎ニ有之候手筋を董次郎江託シ、態与切違可
 申ためニ候与茂被存、何歟子細茂可有之候様承取候間、今一応被
 遊御吟味、是又申口深御勘考可有御座候方与奉存候、

〔拾八之内〕^{〔朱書〕}

一 八月廿日附之書状忝通、雲浜宛重よし与認有之候、右書面者前同断
 之事件与相見、既姉小路殿江奥御医師周旋いたし候旨申越候、右記
 柄夫々委細御尋御座候処、

此儀も先年前同様水老君御一件ニ付、為三郎儀出府之節、品川表
 へ差越候書面ニ有之、此者儀名前不存候得共、奥御医師へ姉小路
 殿江周旋いたし候付、前頭八幡周旋之儀者見合呉候様申越候儀ニ
 御座候旨申之候、

一 文中ニ野村与有之候儀者、此程申立候野村淵藏与申者ニ有之候哉、
 御尋御座候処、^{〔恒見〕}

此儀、此者同士周旋いたし呉候福井藩中野村淵藏之儀ニ御座候旨
 申之候、

〔拾九〕^{〔朱書〕}

一 水府御家老江被仰渡候同老君御家政向御携相成候儀等之御書付与忝
 通、并四月七日附之書状忝通、梅田宛慎之助与認有之候書面、全為

三郎願望成就いたし候付申越候儀ニ相聞、文中ニ木崎与有之候儀者
 何れ之ものニ候哉、右訳柄委細御尋御座候処、

此儀九ヶ年以前戊年、為三郎儀遠州浜松ニ妻子有之候付、旁同所
 迄出途いたし候処、水老君御家政向ニ御携等被仰出候旨、前頭難
 波田弘藏承知いたし、同人儀江戸表へ為三郎方江為知越、其節弘
 藏紀州江所用有之候折柄ニ付、旁同人ニ為持此者方江差越候書面
 ニ而、木崎与申者弘藏替名ニ有之、既右体水老君公儀表者速ニ相
 濟候得共、水藩内奸之党者其節矢張惑乱いたし居候儀ニ付、速ニ
 不致恢復候儀ニ御座候旨申之候、

〔貳拾〕^{〔朱書〕}

一 七月十七日附之書状忝通、梅田宛為三郎与認有之候、右書面者水府
 老君御再出、其後為三郎儀鬱憤ニ存候奸斗ニ凶を除候付、正順ニ可
 参処、無其儀、藩中復古之勢ニ者相成兼候与有之、右者近年到来之
 文意ニも相聞、又者文中ニ渡辺方江罷越、此もの従弟ニ面会杯与有
 之候故、右従弟与者誰ニ候哉、渡辺権太夫当時之居住態与御尋、追々
 文面之訳柄夫々委細御尋御座候処、

此儀七ヶ年程以前、江戸表へ差越候書面ニ有之、二凶与申者結城
 刁寿、今老君者不計内藤東一郎之事与相心得、水老君御恢復後既
 右兩人者被相除候得共、同人江従党之者共多端混雜いたし居候処、
 水老君人撰ニ而漸岡田新太郎^{〔徳至〕}を被取立、内輪之混雜却而六ヶ敷候
 旨申越候儀ニ有之、且渡辺権太夫儀者、先年若狭守殿御帰府後江

戸詰罷在、一昨年頃帰国隠居いたし、且又前同頃此者甥若州藩中藤木宗治与申候者ハ江戸修学罷在候得共、従弟之儀者差当り相寛不申候旨申之候、

一 此者水府江罷越候儀者有之候哉、御尋御座候処、

一 此儀六ヶ年以前浦賀表江亜墨利伽渡来之砌出府いたし、為遊学上州調子（マ）水府江立廻り、為三郎同志之方江罷越、又者結城刁寿与同派一類友部（養正）八五郎方江も罷越、夫是对話もいたし見候旨申之候、水府老君御恢復相成候二、猶又密用周旋之儀、為三郎（マ）頼越候儀者如何之訳哉、御尋御座候処、

一 此儀前件之外、差当り心得不申候旨申之候、

一 文中二、遠州屋金蔵与申候者内密所用有之、俄二上京一封を附、右者京地而已ニあらず、大坂奈良堺辺ニ渡り用向相達度、泄漏を恐れ候付、同人面会之上内々相尋、右導之周旋可頼候与有之候儀者如何之訳哉、御尋御座候処、

一 此儀右金蔵罷越候節、此者母儀若州表ニ而相果候付、同所江罷越候留守之折柄ニ付、巽太郎方江罷越候由ニ而、恐多候得共、為三郎知ル人右金蔵儀、実者御小人目付神谷麗三郎与申、今忝人金田豊次郎も罷登り候由ニ而、大御目付方（聖護）御沙汰ニ付、当御奉行御政事振并其頃奈良御奉行川路左衛門尉殿、大坂町奉行等之御風聞為探索穩密御用ニ罷登、京地不案内故、為三郎江様子相尋候上、既前書太郎方江罷越候処、当所儒者奥野精一郎儀者、此者と兼而知ル人ニ付、太郎も承知いたし居、依之則精一郎方江差遣候処、同人儀者若年、殊ニ穩密御用与承り心配いたし、其頃兩替町式丁

目ニ罷在候薩州家来儒者坂本謙蔵儀者精一郎知ル人ニ付、同人方江振向御用并相成候旨、其後太郎（マ）此者致承知候付、精一郎江も深口留いたし置候儀ニ御座候旨申之候、

一 此者母儀者、何ヶ年以前ニ相果候哉、御尋御座候処、

一 此儀、八ヶ年以前七月十三日ニ相果候旨申之候、
一 前書麗三郎与為三郎儀者格別知ル人ニ候共、穩密御用を所々ニ而打明し候訳ニ者有之間敷哉、殊ニ前書来状之頃ニ母相果候上者、何年以前与申儀を茂大体覚居可申答之処、無其儀、旁申口不都合ニ可相聞哉之段、押而御尋御座候処、

一 此儀、不都合之御覚申上候儀者恐入候旨申之、併全余事之密用ニ無御座、穩密御用与承り候儀者相違無御座候旨申之候、

一 〔右源次郎申口、聆与御答者仕候得共、臨期差迫切違居候儀も難計奉存候付、今一応も被遊御吟味候方与奉存候、尤為三郎（マ）差越候書類中ニ者難取用候廉も相聞候得共、若哉御吟味御手掛りも可有御座候哉与奉存候付、其俣ニも難仕候間、不殘相認、且又書類ニ水府一件与有之候分者、全産物之用書ニ無御座、都而前条之事柄等ニ相聞申候与奉存候、〕

右之通申立候様奉存候付、承り書仕、申口紛敷候廉者御沙汰之通朱書ニ相認置申候、以上、

午十月

十一月七日 元小浜藩士梅田源次郎定明吟味申口

〔表紙ウ八書〕
梅田源次郎御吟味申口承書

午十一月七日、梅田源次郎（雲浜、定明）所持雜物書類之内を以、御不審之廉御吟味御座候付、源次郎申立承り書

覚

〔式拾壹〕

一 正月廿五日附之書状忝通、雲浜宛巽次郎与認有之候、右名前者全（菊池重善）為三郎之替名与相見、尤書面之内、先年水府之一件品々手入方談越儀儀二相聞、文中ニ彼長女骨肉之人江茂承りくれ候者御座候処、老人下向者兎毛角毛、春ニ不相成候而者出来申間敷与有之候文言、夫々委細御尋御座候処、

此儀拾ヶ年程も以前之頃ニ而、此程申立候水府之一件、姉小路殿江手入周旋之儀ニ付、菊池為三郎儀替名を認、江戸表分差越候書面ニ有之、長女之方与申者、全姉小路殿之事ニ而、骨肉之人与申者、則兵庫之事ニ有之、老人下向与申者、竹嶋を指而申越候儀ニ御座候旨申之候、

一 文中ニ、越侯も当春者御参府、是又第一之良援与申儀御尋御座候処、此儀越前守殿御参府ニ付、右同様水府一件ニ付而者、良援与申儀ニ有之候旨申之、全此頃水藩奸者猶又勢ひ強候与申越候儀ニ有之、尤末文ミノ之アキ与認候廉々、此もの知ル人京地町人亀屋平兵衛

与申もの、江戸表ニ而用人奉公いたし度旨申居候付、為三郎江頼談之返事迄ニ御座候旨申之候、

〔式拾貳〕

一 五月十九日附之書状忝通、梅田宛巽次郎与認有之候、右書面前同様水府之一件ニ相聞、文中ニ齋藤并萩森江一談合ニおよび候処、兩人共至極同意ニ而、方今無類之良策与有之、萩野者何れ之者ニ候哉、夫々委細御尋御座候処、

此儀拾ヶ年程も以前之儀ニ而、為三郎京都分宇和嶋表江罷越候節、此者儀大坂迄送り遣、其後為三郎儀宇和嶋江到着之上、同所分差越候書面ニ而、前頭申立候水府之一件ニ有之、萩森（宋之助）与申者宇和嶋藩中代官役ニ而、齋藤丈蔵与同志之者ニ有之候得共、名前不覚、面会等茂いたし候儀無御座候旨申之候、

一 文中ニ鞍馬・山田・嶋崎又者三輪杯与有之候者、何レ之者ニ候哉、夫々委細御尋御座候処、

此儀鞍馬与申者、巽太郎（世大遜齋）之異名ニ有之、山田与申者、此程分申立居候金之助之儀ニ而、嶋崎与申者、為三郎儀京都ニ而病氣之節療治相頼候、其頃越中富山分罷越居候源次与申医者ニ有之、三輪与申候者、宇和嶋藩中江戸勤番之者と存候得共、不致面会茂候旨申之候、

一 右同断、巽兄周旋八幡之良策与有之、巽太郎水府之一件ニ付、八幡江之手筋周旋不携候旨、此程申立居候得共、右体文面ニ有之候上者、全同人より八幡之手筋可有之候儀哉、押而御尋御座候処、

此儀、前同断石清水江周旋之儀ニ候得共、全巽太郎分手筋を求候

儀二無御座、実々山口董次郎(董次郎、義方)より之手筋周旋二而、尤素々同人者

巽太郎与懇意之処、同人之手引を以此者儀董次郎与懇意二相成、其頃用事等有之候節者、同人儀巽太郎迄申越、同人之此者方江申

聞候儀二有之候付、八幡周旋をも取次いたし候儀有之、夫故為三郎之周旋いたし候儀二而可有之哉、何分太郎直々八幡

江之周旋いたし候儀二而者無御座候旨申之候、

一 素々巽太郎儀、董次郎与懇意二いたし候儀者、此程之可申立筈之処、無其儀段、何角不都合二相聞間敷哉之旨、御尋御座候処、

此儀恐入候旨申之候、

一 此程二茂申立候通、宇和嶋表江差出候願書ハ、仕儀二寄取莊八幡之手筋太郎与認候場も可有之哉二候得共、為三郎之此者江之書状者、

都而有体を以致往復候ハね者相成間敷候趣意柄二有之、然ルニ董次郎周旋之儀を巽太郎之周旋与認候而ハ、何歟不弁利二相聞間敷哉、

素々董次郎二仕成候ハね者不都合之儀有之候故、右体彼是申立居候儀哉与相聞候付、是又押而御尋御座候処、

此儀何分書損二而も可有之哉、巽太郎之周旋一切難相心得、乍併年数も相立候儀二付、猶篤与勘考いたし候上可申上旨申之候、

〔式拾式之内〕

一 十月六日附書状壹通、梅田源次郎宛巽次郎与認有之、右者为三郎書

添之書面二而、同人之鎗之穂壹本渡辺権太夫方江差出候儀迄二相聞、

右訳柄御尋御座候処、

此儀九ヶ年程も以前、為三郎儀江戸表之差越候書面二有之鎗之穂

壹本貫請候迄二御座候旨申之候、

〔式拾三〕

一 写与認、二月十三日拙家老共阿閣(阿部正弘)之呼出、左之通与有之、右者水府

老君御家政向御携相成候儀等之被仰渡書二而、前斎藤丈蔵之手跡之様二も相見候付、何れ之手二入候哉、御尋御座候処、

此儀、「十九印」二有之候水老君御恢復被仰渡書写与同様二而、

右者丈蔵手跡二者無之、定而為三郎同志之者之同人江為知越候本

紙之様子二相見、右者藤田誠之進(彪、東湖)二贗候手跡二付、全同人同志之者之差越候儀与相心得候旨申之候、

〔式拾四〕

一 手跡不分書付案紙壹枚、右者水戸中納言様御家政向二御携等之儀御沙汰有之候儀二付、一刻も速ニ御礼申上度与之趣意二有之、且先年

南陽老先生御在世之御時、私儀中納言様御儀二付宿願之筋御座候而、万端先生御取持二相成、此度恐悦之御沙汰被仰出、右二付山中筑後

守殿江御礼申上度、就而者老先生尊靈江も同断坏与有之、難取留書付二候得共、何れ之者之何レ江可差出積り之書面二候哉、且南陽老

先生与申者何れを指而相認候儀与相心得居候哉之儀、委細御尋御座候処、

此儀先年為三郎義、此者方江書類其外草稿等残し置、右之内之拾出し、保濟秘録江留置候も有之、其砌為三郎残し置候草稿之内二

可有之候哉、全為三郎之手跡与相心得居、尤南陽老先生与申者、恐多候得共、紀伊一位様之御儀を申候儀二而も可有御座哉与相心

得居候旨申之候、

〔式拾五〕

一 四月十六日附之書状壹通、雲浜宛平三郎与認候、右書面者为三郎手跡にも相見、所々立廻り夫是江周旋いたし、帰京延引相断候文意二相聞、右訳柄夫々委細御尋御座候処、

此儀先年為三郎儀、水老君御一件二付、若州へ越前表江周旋二立廻り居候節、途中へ差越候書面二有之、全体為三郎儀、多田与名乗候者、同人母者越前福井藩中二而多田与申候故、同人儀越前江周旋之折柄二付、多田慎之助二而者差支候間、不取敢平三郎与替名いたし差越候儀二有之、途中日間取候儀を申越候儀二有之候旨申之候、

一 文中ニ濱ノ高論与有之候儀者、何れ之事を申儀ニ候哉御尋御座候処、
(松平武聡)
 此儀濱田殿周旋之儀二付、山田金之助之儀を申越候儀ニ御座候旨申之候、

〔式拾六〕

一 四月五日附書状壹通、梅田雲浜宛南海善与認有之候、右書面難取留儀ニ者候得共、南海善与申者何者ニ候哉、御尋御座候処、

此儀前同頃、為三郎儀若州江罷越候節差越候書面二而、南海善与申者为三郎之儀、其頃専ラ宇和嶋二滞留もいたし候儀二付、右様替名相認候儀ニ御座候旨申之候、

〔式拾七〕

一 四月五日・六月晦日・八月廿日附之書状三通、梅田或雲浜宛斎藤丈蔵又者明与も認有之候書面、文言之内何れ茂菊地為三郎之儀二付而之趣意二相見、右訳柄夫々委細御尋御座候処、

此儀明与者丈蔵之名二而、八月廿日附之分者、此程申立候通拾式

ケ年程以前、宇和嶋藩中斎藤丈蔵へ異太郎之伝手を以、為三郎儀水老君御恢復可相成周旋之儀此者江相頼、其後丈蔵弟大野昌三郎儀出府之節、前書此者为三郎へ頼を請遣候儀、宇和嶋表へ挨拶申越候儀二而、四月五日附之分者、拾壹ケ年程以前々同所へ差越候書面二有之、是又為三郎儀水府一件二付而懷病相成、且者为三郎を以丈蔵江義人録之意を託解遣シ候返書等二有之、六月晦日附之分者、是又同年為三郎前一件二付上京いたし居候折柄、丈蔵儀前同所へ差越候書面二而、為三郎出府いたし候ハ、永ク在留御恢復可相成工夫いたし、此者へ勸メ候様申越候儀ニ御座候而、余事之次第二無御座候旨申之候、

一 右六月晦日附之文中ニ、福永甚吉与有之候儀者何れ之者ニ候哉、御尋御座候処、

此儀、福永甚吉儀者丈蔵与兄弟之由承り、書用之外二名前留置未タ不致面会候旨申之候、

一 丈蔵儀當時者如何いたし居候哉、御尋御座候処、

此儀丈蔵儀、拾ケ年程以前二江戸勤番候後宇和嶋江引取掛ケ、此者方江立寄、其後者絶而互二不致通路候旨申之候、

〔式拾八〕

一 二月七日附副啓与有之候書状、半紙式枚二異太郎宛斎藤丈蔵与認候、右書面者全水府老君御一件二相聞、文中ニ忠臣数拾輩幕府ニ赴キ愁訴いたし候得共、御聴無之故、為三郎天朝諸公及ヒ紀州様江周旋いたし候より、引続尚又敵藩ニ至り時を待居候処、最早機会二付湯治ニ託し、猶又天朝諸公及ヒ越州藩等江周旋之儀、此者江面会教ヲ請

度紹介無人俱々事を謀候与之儀、外虜出没ニ託し候而之頼状ニ有之、
右者此程申立候〔朱書〕「拾四印」之趣意ニ相聞、乍併天朝諸公江周旋与有
之上者、此者ニおいて手筋之先々有之候付、既丈蔵〔朱書〕江其旨申
越候儀ニ可有之旨、強而御尋御座候処、

此儀御吟味之通、拾式ケ年以前、斎藤丈蔵〔朱書〕江此者手引之
来状ニ有之、既此程申立候通、水老君御事、外虜海慢之時世ニ不
被為成御広ク候儀を以、此者儀為三郎与同志周旋頼越候書面ニ付、
為証太郎〔朱書〕江請取所持いたし居候儀ニ有之、尤天朝之諸家方手筋者、
此者おいて更ニ無之候得共、為三郎之意中を認差越候迄ニ御座候
旨申之候、

〔朱書〕「右源次郎答方、子細無御座候様相聞候得共、為三郎義ハ差置、丈蔵
江太郎迄天朝之手筋与申来候上者、御吟味之通、宮堂上方ニ更ニ手
筋も無之、源次郎を指而右体申越候筋ニ者難相聞、然ル上者當時之
御手掛り可相成儀を為可押包、此程以来自分者手筋無之段申立候哉
共相聞候付、何分此上被遊御勘考候方ニ可有御座哉与奉存候、」
〔朱書〕「式拾九」

一 日付不分、書状半紙式枚ニ梅田宛益与認候、右書面ハ為三郎儀を賞
美之文言ニ而、同人此者方江差向可然周旋いたし呉、事成候得者天
下之幸也与有之候付、夫々委細御尋御座候処、

此儀前条同頃ニ而、益与申者〔頼護〕山陽之高弟森田建蔵与申、其節郡
山ニ罷在為三郎同所辺遍歴いたし居、前条斎藤丈蔵伝手を以、為
三郎儀此儀もの方江罷越候節、為三郎江建蔵〔益、節齊〕も右書面為持越候
儀ニ而、全水老君御恢復可相成周旋相頼越候最初之手続迄ニ御座

候旨申之候、

〔朱書〕
「二拾」

一 七月十五日附之口上書卷通、梅田源次郎宛宮崎定太郎与認候、右書
面ニ多田慎之助〔目下部伊三治翼〕而名前致承知、三条執事江之両書達し置呉候与
有之候付、右沢柄委細御尋御座候処、

此儀拾壹ケ年程以前之儀ニ而、宮崎定太郎者此程申立候素薩州浪
人ニ而、水府江被抱、其後諸家江立廻り居候ものニ有之、為三郎
宇和嶋〔三〕江此者方江罷越候ハ、同人江書面届呉候与申儀、其頃〔三〕
法輪殿伝奏ニ而江戸表江御下向之節、執事ニ近付相成候由ニ而、
手紙届呉候様申越候儀ニ御座候旨申之候、

一 右三条殿江、定太郎江手續を以、此者入込可申哉之儀御尋御座候処、
此儀、畢竟書面差出候迄ニ而、決而手筋無御座候旨申之候、

〔朱書〕
「三拾之内」

一 六月九日附書状卷通、梅田源次郎宛宮本岡右衛門与認有之候、右岡
右衛門者何レ之者ニ候哉、委細御尋御座候処、
此儀宇和嶋藩中大坂蔵屋敷詰之者ニ而、同所江之書面等往復取次
相頼候ものニ有之候旨申之候、

〔朱書〕
「三拾之内」

一 江戸久保町水野大監物殿御家中大炮師松下寿醉、遠州浜松七軒町板
屋庄八郎与認候端書卷枚、且又両国小泉町朝川〔震〕晋四郎方宮崎定太郎、
江戸本郷三丁目横町戸賀崎熊太郎方多田慎之助与認候端書卷枚、右
者何等之儀ニ而所持罷在候哉、委細御尋御座候処、

此儀松下寿醉者、此程申立候富永昌次郎之師匠ニ而、大炮製作い

たし者ニ有之、板屋庄八郎ハ為三郎妻里方之親類ニ而、朝川晋四郎儀者宮崎定太郎之学問師匠ニ有之、且戸賀崎熊太郎者為三郎劍術之師匠ニ候而、書状取遣届ケ先之便宜、此もの心得迄ニ記シ置候旨申之候、

一 六ヶ年以前此者出府之節、為三郎二者何レ之所ニ而面会いたし候哉、御尋御座候処、

此儀此者出府之節、為三郎儀者御旗本大井十太郎殿門長家借請罷在候儀ニ御座候旨申之候、

〔三拾壹〕

一 名前附込手扣帳巻冊、右夫々委細御尋御座候処、

此儀七ヶ年以前子年出府いたし、同年〆翌丑年二月迄江戸表ニ罷在、夫々上州・総州或常州路々水府江罷越、猶又江戸表江立帰り、其後中山道々北国筋江罷通り越前表江罷越、同年九月帰京いたし候節、初メ京都出立之砌々知音之向等名前附いたし、又者夫々先々ニ而名前承り書留置、其後ニ至り近頃迄も同様追々名前記置候儀ニ御座候旨申之候、

一 前帳面内ニ「○●△」印等有之候儀、如何之訳哉御尋御座候処、

此儀印有之候分者全水府藩中之者ニ有之、右「△」印者為三郎同志人物宜候ものニ而、「○」印者如何様之筋ニも可相成人物ニ有之、「●」印者結城同志之人柄故、前書水府江罷越候節江戸表ニ而名前相認、又者水府ニ而も相記、詰り同所学問所師範同藩豊田彦三郎与申もの儀心得して、右印付呉候儀ニ御座候旨申之候、

一 此程申立候二者、京都ニ而者近付之もの者余り無之旨申之候得共、

既諸国々為修学夫是知ル人之方ニ寄宿罷在、此もの方江手寄候趣申立、然ル上者寄宿先々之師家又者罷越候ものも多分可致入魂儀ニ相聞、此程以来与申口致齟齬候儀者、如何之訳哉、御尋御座候処、

此儀別懇与申程ニも無御座、何分京都ニ而入魂之もの者尠く候儀ニ御座候旨申之候、

〔右夫々名前帳面之内御尋御座候分、当時死失又者源次郎不得面会候もの等者相除ケ、其余面会いたし候もの者勿論、不致面会候もの且

又死失いたし候もの由も、不審ニ御座候分者別紙二名前相認置申候、

〔三拾貳〕

一 九月十八日附・十月廿五日附之書状式通、梅田源次郎宛三上退介与認有之候、右書面者学論ニ候得共、通例之文通ニ相聞、九月十八日附之書面ニ彼ノ恢復与有之候者水府之一件ニ而者無之哉、且十月廿五日附之書面ニ尊岳丈先生与有之候者何れ之者ニ候哉、委細御尋御座候処、

此儀両通共拾五ヶ年程以前之儀ニ而、三上退介与申者、伊予松山藩中之儒者ニ有之、九月十六日附之書状者前頭山田金之助、此者方江始而罷越候節、退介儀江戸修学済帰国掛ケ同道罷越、其後差越候礼状ニ而、聖賢之語ニ託シ候書面ニ有之、恢復与有之候者全右論議之運ヒニ寄候而認候儀ニ有之、水府之一件ニ拘り候儀ニ而更ニ無之、且十月廿五日附之書状、右同断学議を論候書面ニ而、尊岳丈先生与申候者上原甚太郎之儀ニ御座候旨申之候、

〔三拾三〕

一 三月廿四日附之書状壹通、梅田源次郎宛梁川星巖(孟繼)与認有之候、右書面者佐久間門人を吹挙いたし候文意二相聞、右者如何之訳二候哉、委細御尋御座候処、

此儀当年之事二而、此程申上置候佐久間修理之門人松代藩中馬場恒之助与申者、初而京地江遊覽旁、同領分百姓体之者壹人召連罷登、右百姓体之者学僕之世話いたし呉度旨申聞、星巖方江罷越候付、同人々右書状相添、此者方江差遣し候儀二有之候得共、無程兩人共京地出立いたし候旨申之候、

〔三拾四〕

一 廿日附之書状壹通、高田宛阿月と認有之候、右書面者此者江米煎魚等贈り候取次頼候旨之端書二有之、右ハ何故所持罷在候哉、委細御尋御座候処、

此儀秋良敦(貞通)之助と此者江米五俵・煎魚式俵相贈り呉候節、国産一件二付、村嶋内蔵之進方江書面差越候付、同人々為証右端書斗此者方江差越候付、所持罷在候旨申之候、

〔三拾五〕

一 四月八日附書状壹通、梅田源次郎宛三寺三作与認有之候、右書面文意二おいて子細無之候得共、石州濱田ノ御儒官又者千手謙齋(旭山、興成)等江之伝声頼候旨有之候段、委細御尋御座候処、

此儀拾式ヶ年以前之儀二而、此程申立候三作儀、西国江遊歴いたし罷歸り候上礼状二有之、濱田御儒官与者山田金之助之儀二而、其頃此者方二寄宿罷在、三作西国江罷下り候節、此者方二而初而面会いたし、謙齋儀者其頃京住之儒者二而、三作儀も知ル人二有

之、其後謙齋儀者所々江転宅いたし、当時者猶又京都二住居罷在、右之者等江伝声頼越候儀迄二御座候旨申之候、

〔三拾六〕

一 名前書付五通、右夫々委細御尋御座候処、

此儀、岡田八十二外六人名前相認置候儀者、先年知ル人京都文人岸牛山与申候者、仕儀二寄江州八幡辺江遊歴、書籍・文章売物いたし度旨申之候付、此者知ル人江州八幡町人和歌を相好候田中順次与申候者、同所身上柄宜学者文人等承り合候処、前岡田八十二其外名前申越候付、書付其俣残し置候旨申之候、

一 伊藤伝之助・工藤半右衛門・杉山松助(松介、律義)外四人儀、

右者長州藩中之者二而、工藤半右衛門者頭二有之、外六人之者者同人附足輕二而、先達而兵庫御固メ被仰付候付、右御用二而頃日罷登り、半右衛門外六人共上京いたし候節、此者方江立寄候付、面会いたし候旨申之候、

〔右者全長州藩中二相違も有御座間敷与相聞候得共、御固御用之者源次郎方江立寄候儀、一段不都合二相聞申候付、猶又御聞糺可有御座候方与奉存候、〕

一 六月十二日、赤木勘次郎・吉宮鉄之助京出発与申候書付之儀、是又長州藩中足輕二有之、江戸表々京留守居屋敷江使二罷越候序、此者知ル人同藩木嶋又兵衛与申者書面持参いたし、池田屋与申

候長州定宿二右兩人止宿いたし候付、出発之日附相認候旨申之候、〔右端書之儀も申立之俣二而者其通二相聞候得共、何分何レ之藩中とも認無之、些細之訳二者御座候得共、一応前条伝之助其外等名前実

否、其筋江御聞合被仰出候而者如何可有御座候哉与奉存候、」

一 油屋仁左衛門二而松本為藏行与申候儀者、此程申立候同人事春洞之儀二而、長防州国産一条二付、同人江通路飛脚先相認置候迄二御座候旨申之候、

一 松坂屋与兵衛外拾人儀者、長防州国産一条京地町家世話人右与兵衛（幸賢）人撰いたし、夫々相認候内、丸印有之候松原高倉東香具屋茂兵衛并松原西洞院東山崎屋長兵衛儀者被相除候者二有之候而、則夫々名前長州藩中国産取扱之者迄相見七候書付写二御座候旨申之候、

〔（朱書）右夫々別紙二名前相認置申候、〕
〔三拾七〕

一 名前書付類七通、右夫々委細御尋御座候処、

此儀西岡治右衛門外老儀者、差当り相覚不申候旨申之候、

一 村嶋屋藤八与申候儀者、村嶋内藏之進分家之旨申之候、

一 越中屋金三郎儀者、越前敦賀定宿二御座候旨申之候、

一 一井直之真倅道之真与申候儀者、此者兼而知ル人当地薩州屋敷詰

水野武一郎方江縁談之儀二付、承合候名前書二御座候旨申之候、

一 窪善助外式人儀者、水府御領分之二而、先達而江戸表二而異人を可殺杯与申之、水府御屋敷二而被捕、公儀江御差出し二相成候者之由承り候、名前書二御座候旨申之候、

一 矢野六太夫・芳梅庵外六人名前書之儀者、近年筑前福岡藩中之者

二而、長州同様福岡之國産交易起立いたし度由、知ル人同藩北条右門与申者（幸賢）の申越、尤芳梅庵与申者六太夫之号二有之、右名前之

者共産物二相携可申候者共故相記置、其俣二相成候旨申之候、

一 御小人目付花井喜十郎儀者、全此程申立候渡辺謙蔵江之便儀宜旨、

同人の申越候迄之儀二御座候旨申之候、

〔（朱書）右夫々別紙二名前相認置申候、〕
〔三拾八〕

一 生田筑後其外名前書并落書之内二、堂上方御名書加江候書付共式通、何故所持いたし居候哉、夫々御尋御座候処、

此儀生田筑後外六人儀者、芸州藩中之者二而、此程申立候此者知

ル人（頼尊）籟三樹八郎の、芸州国産之品、長州同様之振合二起立いたし度旨、此者江申談被込、則同藩中之名前相認差越候迄二而、尤

三樹八郎儀者、於芸州由緒有之候者二御座候旨申之候、

一 近衛殿其外御名認置候儀者、此程申立候通、宣旨有之候旨承り候

節、御名前聴与不承、猶又風評承り候節留置候書付二而、印付置

候方々者御議論家之心覚迄二而、末文落書之儀者、先頃御所向江

立廻り候彦根藩中長野（義言）主馬与申候もの罷越候、客請屋之旨申之候、

前文落書之儀者、来合候蒼生共申居候唱哥迄二而、此者記置候儀

二御座候旨申之候、

〔（朱書）右書面之儀、前文者落書迄二候得共、堂上方書記候跡江猶又落書同

様之名前相見江候儀者、既彦根殿藩中之者罷越候先キを記し置候旨

申立候儀、畢竟難取留者候得共、深ク勘考仕候得者、態与右体紛敷

書込置候儀二可有御座候哉共疑惑仕候儀二御座候、〕

〔（朱書）一 右夫々別紙二名前相認置申候、〕
〔三拾九〕

一 西洋列国史略、佐藤百祐撰（信淵）四冊、何れの手二入候哉、御尋御座候処、

此儀、此程申立候知ル人防州之僧月性(赤根)赤根武人江遣し、同人此者方江残シ置候旨申之、佐藤百祐者奥州者二而、同人著作二有之、文化六年阿州二而認候書物之旨申之候、

一 籌海私議、水野越州(忠郡)侯藩塩谷綱藏(甲藏、世弘、岩陰)著述巻冊、何れ手二入候哉、御尋御座候処、

一 此儀、此程申立候先年為三郎より差越候書籍之旨申之候、

一 海防億側全部之内抜書巻綴、何れ手二入り候哉、御尋御座候処、

一 此儀、此程申立候先年斎藤丈蔵(應測)為三郎江相贈り、同人此者江差越候書物二有之候旨申之候、

一 竹内秀明識書述巻冊、何れ手二入候哉、御尋御座候処、

一 此儀昨十月頃、京住蘭学家竹内東伯(秀明)右著述いたし、心付候廉者直シ呉候様申差越置候得共、追々外々同様著述出来候付、右著述其俣二而相止メ候旨申之、此外二も同人著作(泰西王氏銃譜カ)応手銃譜(泰西王氏銃譜カ)与申書物も、

一 此者序文いたし候儀二有之、尤東伯儀者、当御家中田中盛之進親類大津石原清一郎殿手代矢部喜代平与申者、此者知ル人二付、此者右喜代平江申込、同人手続を以東伯儀当御奉行江御出入二相成候旨申之候、

一 著述不分文書草稿巻綴、何れ手二入候哉、御尋御座候処、

一 此儀大津石原清一郎殿組同心甚太郎俣上原甚八郎作二而、此者江点作之儀頼越、其俣二差置候旨申之候、

一 右文中ニ与中村雄哉書与有之、同人儀者何れ之もの二候哉、御尋御座候処、

一 此儀右雄哉者大津医師之旨申之候、

一 与鉸藏竹中兄書巻綴、何れ手二入候哉、御尋御座候処、

一 此儀、美濃国関ヶ原円隆寺次男不破要人与申、御寄合衆竹中圖書助殿近習相勤居、同家中竹中鉸藏与申者江相与候書二而、右要人ハ此者知ル人二付点作頼越、其俣二差置候旨申之候、

一 序文集書巻冊、何れ手二入候哉、御尋御座候処、

一 此儀、宋南甫之文議宜所丈拔取、兼而蒼生等二認させ置、此者所持罷在候旨申之候、

一 文章草稿集冊、何れ手二入候哉、御尋御座候処、

一 此儀此者先年大津二罷在候節、門人乾十郎儀(嗣竜)此者咄いたし候儀を書取作文いたし候旨申之、尤世竜与申候者右十郎之事二御座候旨申之候、

一 難取留通例書面之内(朱書)

一 籠居主人与有之、右者何れ之者二候哉、委細御尋御座候処、

一 此儀此程申立候此者父十助儀(矢部義比)、先年帰国後慎居候節、此者方江差越候書面二付、籠居与相認候儀二御座候旨申之候、

一 右同断(朱書)

一 老叟与有之、右者何れ之者二候哉、委細御尋御座候処、

一 此儀是又前同断、此者父十助之儀二有之候旨申之候、

一 右同断書付之内(朱書)

一 伏見山科両御殿并御奉行所等貸付方仕法書付巻通、右者如何之訳哉、委細御尋御座候処、

一 此儀古高周助儀、名目貸付いたし度候付、銀方二可相成候者共、此者承合周旋いたし呉候様申之、其節周助ハ差越候右伏見殿并山

科毘沙門堂、其外京町御奉行所等之名目貸付振合之書付ニ御座候

旨申之候、

〔右源次郎儀、最初御吟味御座候砌、古高周助儀者入魂ニ無之旨申立、

既前書ニ而者知ル人ニ有之、其上貸付仕組申談候上者、入魂ニ無之

与者難相聞、尤右周助儀者周蔵ニ引当り候様相聞、不審ニ奉存候、

〔前同断書面之内〕

一 藤井りて与有之、右者何れ之者ニ候哉、委細御尋御座候処、

此儀りて与申候者、此者姉之旨申之候、

〔右同断〕

一 国明通与有之、右者何レ之者ニ候哉、委細御尋御座候処、

此儀国明与申候者、知ル人京住儒者ニ有之、尤同人儀者先年相果

候旨申之候、

〔右同断〕

一 速見律右衛門与有之、右者何れ之者ニ候哉、委細御尋御座候処、

此儀速見律右衛門儀者、知ル人丹州田辺之儒者ニ而、式拾ケ年程

以前相果候旨申之候、

〔右同断〕

一 児玉長弥太・児玉元次郎与有之、右者何れ之ものニ候哉、委細御尋

御座候処、

此儀元次郎儀者若州藩中ニ而、長弥太之父ニ有之、長弥太儀者先

年相果候旨申之候、

〔右同断〕

一 山岸莞爾与有之、右者何れ之者ニ候哉、委細御尋御座候処、

此儀前同断、若州藩中ニ御座候旨申之候、

〔右同断〕

一 矢部とみ宛北条阿茂与有之、右者何れ之ものニ候哉、委細御尋御座

候処、

此儀とみ与申候者此者姪ニ有之、志け儀者此者之伯母之旨申之候、

〔右同断〕

一 長上与有之、右者何れ之者ニ候哉、委細御尋御座候処、

此儀長上者寺尾元七与申候者ニ而、知ル人京住之医者ニ有之、拾

七八ケ年以前相果候旨申之候、

〔右同断〕

一 橋本勘兵衛与有之、右者何れ之者ニ候哉、委細御尋御座候処、

此儀勘兵衛義者若州藩中之旨申之候、

〔右同断〕

一 宮田源左衛門与有之、右者何れ之者ニ候哉、委細御尋御座候処、

此儀源左衛門儀者若州藩中、江戸ニ罷在此者親類之旨申之候、

〔右同断〕

一 膳所旅宿ニ而市郎与有之、右者何れ之者ニ候哉、委細御尋御座候処、

此儀市郎儀者百姓ニ有之、此者方ニ寄宿罷在候者之旨申之候、

〔右同断〕

一 竹内某宛ニ宮家作与有之、右者何れ之者ニ候哉、委細御尋御座候処、

此儀家作儀者知ル人宇和嶋医者ニ而、其砌京都ニ罷在候竹内某江

届呉候様申参り候得共、居所不相知候付、其俣ニ所持罷在候旨申

之候、

〔右同断〕^{〔朱書〕}

一 中村新十郎与有之、右者何れ之者二候哉、委細御尋御座候処、

此儀新十郎儀者薩州藩中二有之、拾七八ヶ年以前此者薩州表江罷越候節、知ル人二相成候旨申之候、

〔右同断〕^{〔朱書〕}

一 名和桂之助与有之、右者何れ之者二候哉、委細御尋御座候処、

此儀桂之助儀者肥後藩中二而、此もの式拾式三歳之節面会いたし候者二御座候旨申之候、

〔右同断〕^{〔朱書〕}

一 大股此面与有之、右者何れ之者二候哉、委細御尋御座候処、

此儀此面儀者、知ル人京烏丸三条下ル丁卜隠与申書家二而、元紀州之者二有之、当時京地二罷在候者之旨申之候、

〔右同断〕^{〔朱書〕}

一 忠友与有之、右者何れ之者二候哉、委細御尋御座候処、

此儀忠友儀者、知ル人保井田兵介〔總井田忠友〕与申国学者二而、先年相果候旨申之候、

〔右同断〕^{〔朱書〕}

一 長沼武惣右衛門与有之、右者何れ之者二候哉、委細御尋御座候処、

此儀武惣右衛門儀者豊後中津住劍術家二而、式拾ヶ年程以前岡田右門与申劍術修行之者右書面持参り、全此者名前聞付、右門手引之書面二有之候得共、武惣右衛門者此者知ル人二無御座候旨申之候、

〔右同断〕^{〔朱書〕}

一 富田謙与有之、右者何れ之者二候哉、委細御尋御座候処、

此儀富田謙祐与申、知ル人出羽窪田佐竹殿藩中之医者二而、式拾ヶ年程以前差越候書面二有之候旨申之候、

〔右同断〕^{〔朱書〕}

一 寺井徐平与有之、右者何れ之者二候哉、委細御尋御座候処、

此儀徐平儀者、丹後田辺藩中二而先年知ル人二有之、則当年茂罷越候旨申之候、

〔右同断〕^{〔朱書〕}

一 福水重兵衛与有之、右者何れ之者二候哉、委細御尋御座候処、

此儀先年若州藩中二右名前之者有之、同人二而茂可有之哉、睨与相覺不申候旨申之候、

〔右同断書付之内〕^{〔朱書〕}

一 十一月十四日附、深瀬繁宛丸屋保兵衛与認候具足差物棒旗半面代請取書彙通、右者如何之訳二候哉、委細御尋御座候処、

此儀京都武具師丸屋保兵衛方江、前頭名前帳之内知ル人十津川田良原村深瀬繁〔維正〕、此者世話二而、具足其外共相詔候代金請取書迄

二御座候旨申之候、

〔別廉書類之内〕^{〔朱書〕}

一 長防両国等之国産書加候往復文通二名前相見江候、野崎主計〔正盛〕・村嶋内蔵之進〔大樂〕・春洞・山口董次郎・草加八百平・平嶋后太郎・源太郎〔大樂〕右八人之趣意、委細御尋御座候処、

此儀主計儀者、前頭名前書帳二有之候十津川之者二有之、同所二而之長防州国産一条二付発願人二有之、内蔵之進・春洞儀者此程

分申立候通国産一条ニ携居、董次郎儀も是又近頃同様罷在、八百平与申候者、辻富十郎殿与申御簾本之隠居二而、近頃上方被致遊歴、甲州江長防州之塩送り度旨、此者江被談試候処、昨年被相果、源太郎・后太郎儀者長州家老児玉某家来ニ有之、武人抔と同様之者二而、月性与一緒二面会いたし、尤夫々国産一件ニ携候知ル人ニ御座候旨申之候、

〔別廉書類之内〕
〔朱書〕

一名前不分書状壹通、右者水戸紅花之儀直段書等申越候儀ニ有之、右者何れハ差越候書状ニ有之候哉、委細御尋御座候処、

此儀先年分前頭為三郎儀、水府之紅花弘ク売捌可相成工夫方之儀、此者江申込居、其後董次郎を以紅花問屋等ニ而直段為承合、則申越候書付ニ有之、全此度之塩一条而已ニ而者無御座候旨申之候、
一 右申立候紅花一条ニ茂不限、近頃塩交易之儀ニ付而も、今般取調候書類数通之内ニ、水府国産一条与申候儀者不相見、旁不都合之旨猶又御尋御座候処、

此儀此程分申上候通、全近頃水府ニ拘り候儀を御答申上候儀ニ有之、尤堺町人具孫与申候者、水府・長州共産物之世話いたし罷在候付、村嶋江之書面ニ水戸一条与申候儀茂御座候旨申之候、
一 村嶋江之書面之内、漸壹通之文面ニ水府一条与有之、其余認有之候儀者不相見、何分不都合ニ可有之哉之旨、御尋御座候処、

此儀前頭為三郎儀周旋いたし候儀も、年数相立、事済之儀ニ有之、其上同人江六ヶ年程も不致面会候儀ニ付、旁此頃之儀与存、前書御答申上候旨申之候、

一 此者出生之住所分追々御吟味有之候儀を為三郎儀周旋いたし、此者江頼込候水府之一件ニ限り過去去候抔与、此者差略を以、最初委細ニ不申立罷在候儀ハ如何之訳ニ候哉、御尋御座候処、

此儀、何分心得違いたし居候儀ニ御座候旨申之候、
右夫々先達而於京都源次郎御引渡之節、同人雜物書類請取差上候分ニ御座候、

御旅亭ニ而御請取御座候、源次郎家内ニ有合候書付類之内を以、御不蕃〔番〕之廉御吟味御座候付、同人申立承り書
〔四拾〕
〔朱書〕

一 八月廿五日附、半紙横折五枚壹綴、梅宛孫兵衛与認候、右書面者江戸表風説之書付ニ而、彦根藩中江戸何某書翰写与有之、右者水府老君井伊掃部頭殿御事、且宮中等之不取留風説承合候返事ニ相聞、右者此程申立候此者分孫兵衛方江申遣候儀与相違之旨、同人分申越候儀哉与相見江候付、右訳柄夫々委細御尋御座候処、

源次郎申口

此儀初而御吟味之節申立候、外寇交易御免之御約定相濟候ニ付、
關東江宣旨有之候旨栗田宮〔青蓮院尊融入道親王〕ニ而承り候儀を壺口孫兵衛江申遣候処、
若州殿執事之もの分彦根殿藩中江聞合ニ相成候儀哉、此もの申遣候儀与者相違ニ付、委細申越、併猶又此者承り候儀茂有之候ハ、為聞呉、尤格別秘書ニ付、一覽之上早速差戻候様相認、最早可致返却積之処、全体右書面当九月初旬ニ相届候儀ニ付、彼是いたし罷居候内被召捕、尤去月二日御吟味之節、
〔拾六印〕
〔朱書〕之書面与都

合三通一緒ニ孫兵衛ハ到来いたし候儀ニ而、何分秘書ニ御座候旨申之候、

一 右書面者格別秘書与申候上者、此者実説与相心得候而申立候事哉、然ル上者此者粟田宮ニ而承り候儀者、偽之儀を大業ニ若州藩中江申遣候儀ニ相聞、何れを实説ニいたし候而も不容易事柄、此者身分も不憚儀ニ有之間敷哉、御尋御座候処、

此儀何分彦根殿藩中ハ出候儀ニ付、可然様取飭候哉も難計、乍併宣旨を申遣候儀者、於若州御警衛之御心得ニ茂可相成候哉与相心得、却而卒忽ニ風聞申遣候儀ハ恐入、何共不審ニ御座候旨申之候、

〔四拾壹〕

一 三宅高幸江備後三郎之讚いたし遣候文中、楠子或結城・北畠等を奉有之候草稿、又者三寺江送り候序文等都合式枚、文議烈敷相聞候付御尋御座候処、

此儀此程申立候三宅定太郎江備後三郎画像之讚いたし遣候儀ニ付、御吟味之通忠勇之将を引競、備後三郎を賞美いたし候迄ニ而、右草稿残シ置、且又三寺三作先年西国遊歴之節、同人江序文差遣候、是又草稿ニ御座候旨申之、外ニ子細茂相聞不申候、

〔四拾貳〕

一 二月廿八日附之書状ハ通、雲浜宛函齋与認候、右書面ニ当府嚴備、海防急務所存之もの者可致上書候様触出し有之、其外再遊いたし度儀等書加有之、右訳柄等夫々委細御尋御座候処、

此儀当年差越候書状ニ而、右函齋儀者此程申立候坂本謙藏之事ニ有之、五六ヶ年以前ハ此者知ル人ニ相成、既当地ニ罷在候得共、

病氣ニ付薩州江罷歸り、其後文通いたし居、御吟味之通国許之時勢を申越、何分鄙地故早ク伏見江罷登り度旨申越候迄ニ御座候旨申之候、

一 文中ニ田中与有之候儀者、何れ之者ニ候哉、御尋御座候処、此儀田中与有之候者、京住医者田中融与申者ニ而、此者茂知ル人ニ御座候旨申之候、

〔四拾三〕

一 二月晦日附書状ハ通、梅田源次郎宛土屋矢之介与認候、右書面夫々委細御尋御座候処、

此儀昨年差越候書状ニ而、矢之介儀者長州家老佐世主殿家来ニ有之、前頭此者産物之儀ニ付長州表江罷下り候節近付ニ相成、帰京後歎之書面ニ御座候旨申之候、

一 文中ニ、水戸人之贈詩且坪翁与有之候者如何之訳ニ候哉、夫々御尋御座候処、

此儀先年此者水府江罷越候節、塙亮藏与申者博学ニ者候得共、聊面ニ不顕酒狂同様之儀而已申居候者ニ候故、同人江此者詩作相贈り候儀有之候処、矢之介儀も右亮藏同様之人物ニ付、其段相咄、右詩作相贈り候答礼申越候儀ニ而、坪翁与有之候者、長州産物掛り坪井九右衛門之儀ニ而、元来長州之儒者共、産物者俗論之旨申之候付、九右衛門ハ頼を受、同所学寮江此者罷越、国中撫育仁政之旨申聞、九右衛門俱々産物之儀相聞候旨申之候、

〔四拾四〕

一 和歌短冊八枚有之候内、延世与有之候短冊式枚、右者何れ之者ニ候

哉、御尋御座候処、

此儀、先年知ル人伊勢松坂ニ而家里(誠堪)新太郎与申儒者(世古格太郎)之貫請候短冊
二有之、延世者同所之歌人之旨承り候得共、名前者存不申候旨申
之候、

一 立札与有之候短冊壹枚、右者何れ之者ニ候哉、御尋御座候処、

此儀立札儀者、生国江戸之由ニ而、八木文太郎与申、拾五六年以
前大津ニ罷在候歌人ニ而、此者知ル人ニ有之、其後若州江も罷越、
最早相果候旨申之候、

一 道貫与有之候短冊貳枚、右者何れ之者ニ候哉、御尋御座候処、

此儀道貫与有之候者、素京地ニ罷在、六七年以前播州姫路表江引
越参り候、此者知ル人林謙蔵与申医者ニ有之、和歌を誦候ものニ
付、姫路之差越候短冊之旨申之候、

一 春臣与有之候短冊壹枚、右者何れ之ものニ候哉、御尋御座候処、

此儀京西洞院通辺刀研いたし候町人之由ニ而、名前不存、前頭家
里新太郎之貫請候哉与存候旨申之候、

一 長矩与有之候短冊壹枚、右者何れ之者ニ候哉、御尋御座候処、

此儀此程之申立居候永鳥(秀実)三平之儀ニ有之、此者方ニ而認候短冊之
旨申之候、

一 国華与有之候短冊壹枚、右者何れ之者ニ候哉、御尋御座候処、

此儀国華儀者、長州藩中今津太郎与申、同国ニ而之国学者ニ有之、
前頭此者長州江罷下り候節面会いたし候処、同人之贈り呉候旨申
之候、

〔朱書〕
〔四拾五〕

一 名前不分、和文仮名直し等有之候破レ書付壹枚、右文中ニ、叡慮な

やませ又者叡慮をやすめたてまつれ杯与長哥之様ニ相認候儀、委細
御尋御座候処、

此儀浅見十次郎綱齋之作ニ而、正成之小謡ニ有之、一昨年頃此者
慰ニ写し置、仮名直し杯いたし見候迄ニ御座候旨申之、外ニ子細
も相聞不申候、

〔朱書〕
〔四拾六〕

一 三月十九日附、名前不分書状壹通、右文中ニ敦賀之儀喜内其外誰茂
不存候処与有之、諸国海岸之儀茂兼々左様之儀有之度杯認、又者秘
書彼是永ク留置候文言有之候次第、夫々委細御尋御座候処、

此儀先年之事ニ而、此程申立候渡辺權太夫之手紙ニ有之、先年若
州表海防之儀、此者之權太夫江心添いたし候付、右返書ニ有之候
旨申之、喜内与有之候者同所藩中ニ而、其頃町奉行相勤居候駒林

〔朱書〕
〔四拾七〕

一 重墨利伽拾四ヶ条約条与有之候本壹冊、右者何れ之手ニ入候哉、御
尋御座候処、

此儀当七月頃之事ニ而、兼而右様之書類等手ニ入候ハ、貸呉候様、
若州・長州等之藩中之被頼居候処、所司代御組与力之手筋之借受、
写置候得共、何方江も未差遣候儀ニ御座候旨申之候、

〔朱書〕
〔四拾八〕

一 役名前書加候名前帳壹冊、右者何れ之者共ニ有之候哉、委細御尋御
座候処、

此儀前田孫右衛門其外儀者、長州藩中ニ而、産物一件ニ付右同人

分引合セ呉候名前ニ有之、右之内内藤万里助儀者欠違、不致面会

候旨申之候、

〔朱書〕「右夫々別紙二名前相認置申候、」

〔四拾九〕

一 安政四年二月三日附送、月性上人序与認有之候草稿壹枚、文中ニ海防之談論を賞有之、委細御尋御座候処、

此儀月性儀、仏法護国論与題し、仏法ニ託し海防之著作相拵、同派門徒ニ而者専ラ相用居、兼而海防之論議抔至而好候ものニ有之候付、其意を顕シ序文いたし呉候様相頼候付、同人之人与成を此者作文いたし、相贈り候草稿ニ御座候旨申之候、

〔朱書〕「五拾」

一 時勢等ニ託候詩草稿三枚、右者何故所持罷在候哉、御尋御座候処、

此儀拾四五ヶ年程も以前之草稿ニ有之、此者江此程申立候横井平

四郎儀、千早山之矢竹呉候付、楠子表賞矢立之詩作いたし、巽太

郎江相贈り可申与存、其俣差置候草稿等之儀ニ御座候旨申之、外

ニ子細も相聞不申候、

〔朱書〕「五拾壹」

一 諸書之序文壹枚、并野むら都年見与有之、此者江送り候歌壹枚、都

合式通委細御尋御座候処、

此儀前頭山田金之助儀、帰国之節贈り遣候積ニ而、序文之下案拵置候得共、思話敷無之候付、其俣相成、且和哥之儀者是又前顕此者先年出府帰り掛ケ、越前福井江立廻り候節、野村淵蔵の錢別之

歌ニ御座候迄之旨申之候、

〔朱書〕「右四拾壹の末之分者、別段御吟味御手掛り二者相成申間敷与奉存候

得共、名前其外自然此後之御吟味御心覚ニも可相成哉与奉存候付、

御尋御座候分丈ケ、夫々相認候儀ニ御座候、」

右之通申立候様奉存候付、承り書仕、申口紛敷候廉者御沙汰之通朱書ニ相認置申候、尤御吟味御座候書類者、右ニ而不残相済申候儀ニ御座候、以上、

十一月

人名注

阿部平六 小浜藩士。小浜市立図書館所蔵酒井家文庫「由緒記（嘉

永三年）」に「六代目 阿部平六宗陸」とある。

稲葉務人 福井藩家老。福井県立図書館保管松平文庫「剥札 上」

に「稲葉務 敬次郎事 式千百七拾五石」とある。

大河原安楽 小浜藩士。大河原造酒助。酒井家文庫「寛政六年分限帳」

に「大河原造酒助」とある。

大森重右衛門 小浜藩士。酒井家文庫「由緒記（嘉永三年）」に「六代

目 大森十右衛門茂正」とある。

岡田順助 福井藩儒吉田悌蔵（東篁）の弟。岡田準介。福井藩家老

稲葉哉五郎（采女）の家来。

鹿野堅斎 小浜藩士。鹿野蹇斎。「梅田雲浜遺稿並伝」によれば、

旧名権之丞。

児玉長弥太 小浜藩士。酒井家文庫「由緒記（嘉永三年）」に「児玉

長弥太貞風」とある。

児玉元次郎 小浜藩士。酒井家文庫「由緒記（嘉永三年）」に児玉長

駒林喜内

弥太の父として「児玉乙次郎光貞」とある。
小浜藩士。酒井家文庫「由緒記（元治元年）」に「駒林喜内正言」とある。また、酒井家文庫「嘉永五年小浜分限帳」に、未組入無之分として「二百石 駒林喜内」とある。

近藤退蔵

小浜藩医。近藤謙山。名は直義、通称は退蔵。酒井家文庫「由緒記（嘉永三年）」には「七代目 近藤儀左衛門直義」とあり、文政十年（一八二七）に元哲と改名。酒井家文庫「由緒記（元治元年）」には「七代目 近藤元哲直義」とある。産科医として嘉永七年（一八五四）に『達生図説』を著す。

坂部勘介

福井藩家老稲葉哉五郎（采女）の家来。明治初年の松平文庫資料「元陪臣 坤」に「稲葉俊之助元家来 坂部簡助」とある。

鈴木主税

福井藩士。名は重栄。崎門学を修め、弘化二年（一八四五）に側向頭取となり、その後も側締役などを歴任し松平慶永を補佐した。

坪内孫兵衛

小浜藩士。酒井家文庫「由緒記（嘉永三年）」および「由緒記（元治元年）」に「七代目 坪内孫兵衛直満」とある。初名金十郎、のち孫兵衛と称した。また、酒井家文庫「嘉永五年小浜分限帳」に、留守居組として「百五十石 射術師（指）南 坪内孫兵衛」とある。

行方仙三郎

小浜藩士行方百太郎（正守）の弟。梅田雲浜の弟子。「崎門学脈系譜」によれば、行方仙三郎（千三郎）の名は正言。

行方百太郎

小浜藩士。酒井家文庫「由緒記（嘉永三年）」に「行方百太郎正幸」、「由緒記（元治元年）」に「行方百太郎正守」とある。また、酒井家文庫「嘉永五年小浜分限帳」に、未組入無之分として「百廿石 行方百太郎」とある。小浜藩士。酒井家文庫「由緒記（元治元年）」に「九代

野々口四郎

野村淵蔵

目 野々口丹波為久 初名四郎」とある。また、「嘉永五年小浜分限帳」に、江見求馬介組下として「十八人扶持 内十人足 野々口四郎」とある。

北条十郎太夫

福井藩士。松平文庫資料「元陪臣 坤」に「稲葉俊之助元家来 野村恒見 恒輔事 淵蔵」とある。

本多孫左衛門

小浜藩士。酒井家文庫「弘化二年京都分限帳」に「拾一人扶持 四人ふち足 銀十枚 調役進献掛馬廻格 北条十郎太夫」とある。

松田美濃

小浜藩士。酒井家文庫「由緒記（元治元年）」に「六代目 松田美濃秀徳」とあり、組頭役などを勤めた。

三寺三作

福井藩士。大木本弥。肥後に赴き横井小楠の招聘に関わった。明道館学論などを勤めた。

宮田源左衛門

小浜藩士。酒井家文庫「江戸由緒記（嘉永三年）」の宮田安左衛門家の由緒書に「三代目 宮田源左衛門景盛」とある。また、酒井家文庫「文化八年京都分限帳」に、「二百七拾石 銀十五枚 用人公用人兼帯 宮田源左衛門」とある。

森川東

小浜藩士森川太郎左衛門の子。酒井家文庫「江戸由緒記（嘉永三年）」の森川太郎左衛門の由緒書に「倅東」とある。文化十年（一八一三）学問所句読師御雇となり、のち諸生に取り立てられた。

山岸莞爾

小浜藩士。酒井家文庫「由緒記（元治元年）」に「山岸莞爾惟遜」とある。

吉田悌蔵

崎門学派の福井藩儒。名は篤で、東篁と号した。崎門学派に属し、藩校明道館や私塾で藩士や藩士子弟の教育に携わった。

渡辺権太夫

小浜藩士。江戸詰家老などを務めた。酒井家文庫「由緒記（嘉永三年）」によれば、初め実名を政挙（まさのり）と称し、のち挙（あがる）と改めた。また、『梅田雲浜遺稿並伝』によれば、庫山と号し、晩年は白翁と称した。崎門学派の小浜藩儒山口菅山の門人。なお、渡辺権之進は未詳。